

東南保護約款について

—— 日中関係史料よりみたる ——

永 井 算 巳

1 まえがき

ここにいう東南保護約款とは、東華統録^{光緒朝 160} 光緒26年5月庚午の条に「劉坤一張之洞電令上道海余聯沅，与各国駐滬領事，議訂東南保護約款九条」

とあるのに典拠する两江總督劉坤一、湖広總撫張之洞と上海駐在各国領事との間に、光緒26年6月1日^{1900年 6月27日} 不完全ながらも成立した保護上海長江内地通共章程 General Regulation for the Protection of the Shanghai the Yangtze Valley and the Interior を骨幹としつつ两江兩湖安徽兩広一帯に適用をみたのみか、6月18日には閩浙總督許應駿と福州駐在各国領事との間にも互相保護約章として準用されるに至つた東南九省にわたる所謂南清秩序維持協定¹をさすのであるが、当時この通共章程は一般に東南保護約款²とか、中外互相保護章程³とか呼ばれていたようである。

ところで、劉忠誠公坤一別伝、張之洞列伝、李文忠公墓志銘、盛尚書愚齋存稿「行述」からも推知される通り、義和団の乱における清末中国の破局的運命⁶にとって劉張兩總督らによる東南保護約款成立のもつ政治的意味には、義和団の乱を北清事変に喰いとめ得た一要因という角度からみても、今日改めて我々の再検討を必要とする歴史的課題が孕まれているかと思う。

以下、蒐集し得た限りでの日中関係史料に基きながら、約款をめぐる劉坤一、張之洞、李鴻章らの政治動靜に焦点をあわせつつ、義和団の乱に際して占める東南保護約款の政治性格とその意味影響について若干の考察を試みることとしたい。

2 東南保護約款とその成立経過

東南保護約款⁷ 9カ条つまり保護上海長江内地通共章程は

- 1 上海道台余，現奉^{南洋大臣劉 兩湖督憲張} 電示，与各国駐滬領事官，会商弁法，上海租界歸各国公同保護，長江及蘇杭内地均歸各督撫保護，兩不相擾，以保全中外商民人命產業為主
- 2 上海租界公同保護章程已另列条款
- 3 長江及蘇杭内地各国商民教士產業，均歸^{南洋大臣劉 兩湖督憲張} 允認切實保護，並移知各省督撫，及嚴飭各該文武官員，一体認真保護，現已出示，禁止謠言，嚴拿匪徒
- 4 長江内地，中国兵力已足使地方安靜，各口岸已有各国兵輪者，仍照常停泊，惟須約束水手人等不可登岸
- 5 各国以後，如不待中国督撫商允，竟自多派兵輪，駛入長江等处，以致百姓懷疑，藉端肇衅，戕壞洋商教士人命產業，事後中国不認賠償

6 吳淞及長江各砲台，各国兵輪切不可近台停泊，及繫对砲台之处，兵輪水手亦不可在砲台附近地方摻練，彼此免致誤犯

7 上海製造局火薬局一帯，各国允兵輪勿往遊戈駐泊，及派洋兵巡捕前往，以期各不相擾，此局軍火專為防剿長江内地土匪，保護中外商民之用，設有督撫提用，各国毋庸驚疑

8 内地如有各国洋教士及遊歷各洋人，遇偏僻末經設防地方，切勿冒險前往

9 凡租界内一切設法防護之事，均須安靜弁理，切勿張皇以搖人心^(東華統録160 光緒26年5月庚午の項)からなっており，第2条にいう上海租界公同保護章程は，保護上海租界城廂内外章程¹⁰8条として

租界内華人以及産業，応由各国巡防保護，租界外洋人教堂教民，応由中国官妥為巡防保護，遇有警急之事，互相知照妥弁（第1条）

以下が別個に提示されたのであるが，保護上海長江内地通共章程の基本性格は，その第1条に要約されている如く，上海租界を各国共同の政治責任に委ねる代りに，長江流域や江浙地方は清国側の完全な自主管理下におくこと即ち，相互不干渉への相互確認という点にあり，その意味では申報の所謂中外互相保護章程の呼称が妥当ではあるが，章程の全般的印象としては長江流域と江浙内地に対する列国干渉への防衛気構えが濃厚であり，清国側が自ら東南保護約款と称した所以もそこにあると考えられる。換言すれば，この約款は表面，中外互保を唱えながらも，狙いは東南保護にあるという二重の政治的性格構造をもつと解釈出来よう。とすれば，かかる基本性格を包蔵する東南保護約款はそれが提案された時期から判断しても，義和団の乱の破局的推移過程の南清地域に於ける政治的反映の一所産と見做しうべく，げんに愚齋存稿「行述」は，盛宣懷が5月25日の宣戦の上諭を「矯偽」とみて反対運動を展開し，李鴻章はじめ粵江鄂閩各省督撫の賛成を得たこと，北清戦況の緊迫化を反映して東南清地域の開港場にも列国兵艦の動きがみられ民情不安に陥つたこと，事態を憂慮した盛宣懷が「東南互保」を首倡して督撫に働きかけ，その同意のもとに上海領事団と交渉を開始し東南保護約款に成功したこと，従つて東南清地域の確保は事実上，約款成立の主役たる盛宣懷の功績に帰せらるべきこと等を記述している。

一体，光緒26年5月17日^{1900年 6月13日}に於ける義和団の北京公使館包圍，21日の日英独露陸戦隊の大沽砲台占領，25日の北京政府による宣戦布告から，7月21日^{8月 15日}の北京陥落に至る2ヵ月間は北清事変のクライマックスに当る時期で，この間，東南清各督撫が切迫する破局回避のために如何に苦慮しつつあつたかは，例えば，李秉衡，鹿伝霖，王之春，松寿，于陰霖，俞廉三，張之洞，劉坤一ら連署の総署及び榮祿あて5月24日づけの電奏が「宗社安危所關，間不容髮，再過數日，大局決裂，悔無及矣」と述べて，即時に「力剿邪匪，嚴禁暴軍」の諭旨をくだし，李鴻章に和平交渉の担当を命ずると俱に米国公使に停戦調停の依頼あらんことを要請したのに徴しても想見に難くないが，就中，劉坤一張之洞の両者が「邪術は敵を禦ぐ能わず，乱民は国を保つ能わず，外兵深入して各省に横行し会匪四起するあらば，大局潰爛し悔ゆとも追うべからず」¹⁰と義和団を邪術を奉ずる乱民ときめつけて，公然「定計主勦，先剿後撫」を総署に会奏するに至つたのは

5月19日を最初とするようであり、然かもその背後には盛宣懷の動きが介在していたらしい。即ち、愚斎存稿によれば、¹¹盛宣懷は5月当初以来、総署や栄禄にあてて屢々義和団の危惧すべきをうつたえたのであるが、13日づけ李鴻章の来電をうけての5月16日に於ける劉峴帥張香帥あて電文、18日づけ袁世凱来電をうけての同日の劉張あて打電、乃至は18日づけ劉張来電とくに劉坤一の「敝処しばしば北洋に切電し並びに湖広と会奏を電約、¹²速やかに明論して痛剿せんことを請う。未だ知らず諸公の意に於ていかん」なる電文に這般の事情が辿り得られるであろう。換言すれば、盛宣懷は李鴻章袁世凱と連絡する一方、劉坤一張之洞に懇請、かくて劉張両者の会奏をみたわけで、盛宣懷は云わばその媒介約機能を演じたものと解釈出来よう。

劉張両者の積極的関心が長江流域を中心とした東南清地域の秩序維持確保に注がれたことは、彼等が两江総督、湖広総督たる以上、国家の非常事態に対処する当然の責務であつたではあろうが、特に長江流域一帯は揚子江沿岸不割譲協定をもつ英国をはじめ列国の政治経済利権のからみ合う国際係争地点であつたのであり、それは例えば、列国の帝国主義的侵出の重要拠点たる租界の分布状況が、¹³英国日本が圧倒的で米仏独が之につぐ割合であつたのみか、北方に優越的勢力圏をきびきびあつたツアリズムロシヤも長江の要衝たる漢口には一拠点を抑えていたという事実を、周知の如き日清戦争以来激化の一途を辿つた租借地、鉄道敷設、鉱山採掘権、借款事情、乃至はジョーソヘイの門戸開放機会均等宣言や英独揚子江協定締結への動き等に考量すれば、一段と重層的に理解されることであらう。

清末中国をめぐる帝国主義勢力間の相互矛盾の姿相をさぐる傍証までに一二を例示すれば、まづ、駐仏公使栗野慎一郎によつて当時可成りに注目されたロベル・ド・チー「支那の難題」¹⁵（*デニバー新聞*）^{6月24日}がある。彼はシナ問題の困難さが当面する義和団の平定よりも「平定後ニ起ルベキ列国間ノ政治的問題」にあると冒頭した後、露英間の現実的矛盾をふまえつつ「露国ハ北京朝廷ノ上ニ一種特別ナル勢力ヲ有スルニヨリ現皇室ノ実権ヲ滅殺スルコトハ其好マザル所ナルベキモ英国ノ利益ハ之ニ反シ支那ノ朝廷ヲ自己ノ勢力範囲内ト思惟スル所ノ揚子江畔ニ還サントスルノ希望ヲモ既ニ発表シタリシコトアリ、又ター歩ヲ進メテ北京政府ノ実力虚弱ニシテ現今ノ禍乱ヲ平定スルニ足ラスト假定セン乎、列国ハ支那帝国内ニ各々或ル地域ヲ割シ自ラ禍乱ヲ平定セザルベカラザルニ至ラン、而シテ其地域ヲ定ムルコトニ付列国ノ一致ヲ破ラザルコトハ如何ニシテ之レヲ実行スルヲ得ベキヤ」と述べて帝国主義勢力間の対清分割支配への複雑な矛盾対立をほのめかし、ついで、外相デルカッセの言明を引用して「アラユル手段ヲ以テ支那帝国ノ存在ヲ維持シ其政府ニ対シテハ或ル国際的監督ヲ行ヒ漸次ニ泰西ノ文明ヲ注入シ殊ニ或ルー国ガ其独力ヲ以テ支那ノ軍制等ヲ改革シ以テ之レヲ其統御ノ具ニ供スルガ如キ事ノ發生スルヲ予防スル」という国際監視機構による現状維持論が仏国の原則的対清態度であること、但し、最悪の場合は「雲南広東広西貴州ノ四省」は「仏国ノ版図ニ帰」せしめるべきであること、だが「列国ハ多分之ヨリ優等広大ナル版図ヲ得、以テ優勢ヲ占ムルニ至ルヤモ測リ難ク、カクテハ仏国ノ利益ニ反対スルヲ以テ仏国ハ日米伊等可成分割者ノ多数ニシテ互ニ其勢力ヲ相平均シ間接ニ英国ノ揚子江畔ニ於ケル優勢ヲモ牽制スルノ結

果ヲ生ゼンコトヲ望ム」と論じている。右の主張が当時、現実には南阿戦争に手をやいていた筈の英国に警戒的であるのは国際政治面に於ける露仏の緊密な国家関係に起因するのであろうし、雲南両広貴州を版図に収めんと意図するのは「雲南雑誌」などに於て清末留日学生界が激しく指弾してやまなかつた¹⁶処からも推量出来る通り、仏国のインドシナ防衛への政治的配慮に出たものであろう。次ぎに引用したいのはミットフォードの¹⁷ロンドンタイムズ(7月12日)掲載書簡が惹き起した欧州輿論の反響についてである。ミットフォード書簡は北清事変に乗じて日本が排欧の日清同盟を成立させる危険ありとして之をカイゼルの所謂黄禍論の具現だと懼れ、満州と北シナを露国に委ねることこそが長江流域に權益をもつ英国にとつても有利である旨を強調したものであるが、栗野公使は、その反響について「同タイムズ之ニ評論ヲ加ヘ賛成ノ意ヲ漏シ、続イテ英国ノスペクテーター及ビモーニングリーダー之ニ雷同シ其言ヲ誇張シ以テ日本ノ将来怖ルベキ事ヲ痛論シタリシカバ其影響仏国ノ言論社会ニ波及シ日本ノ行為ヲ疑ヒ日本ノ危険ヲ鼓吹スルノ声四方ニ反響シー紙ノ之ニ反論スルモノナク黙スルニアラザレバ即チ日本ノ攻撃ト云フ有様ニ立チ至リ…(中略)…ル・タン、デバ・ゴローア、パトリー其他数多ノ新聞ハ其言異ナリト雖モ大体ハ日本ガ早晚支那ト一致シ4億ノ人民ニ号令シ其固有尚武ノ精神ヲ吹キ込ミ以テ欧洲ニ反対スルニ至レバ之レハ由々敷大事ニシテ到底欧洲ノ強敵タルヲ免レズ、サレバ日本ヲシテ今回ノ機ヲ利用シテ支那ニ優勢ヲ独占セシムル如キハ極力排斥セザルベカラズト論ジ、又タ政客中ニモ続々新聞ニ投書シ黄色人種ノ危険 Yellow Peril ヲ喋々シテ日本抑圧ノ議論ヲ称ヘ平素沈黙ヲ守ルモノモ前記論旨ニハ首肯スト云フ有様ニテ從テ其反応モ亦意外ニ偉大ナリシハ本官ノ遺憾トスル処ニ有之」と黄禍論にわく欧州各国の対日輿論を報告している。尤も、かかる対日輿論の動向は爾後に於ける日本政府の釈明努力と日本軍隊の自重的行動とによつて殆んどその影をひそめたというが、それにしても、以上の二例証は義和団の乱をめぐる帝国主義的勢力間の対清相互矛盾のもつ基本的様相を可成り鮮明に示唆していると云えないであろうか。然かも、我々の忘れてならないことは、帝国主義的勢力間のかくの如き内在矛盾こそが対清相互牽制という国際政治的意味に於て列国の対清軍事協同方式を可能ならしめ、遂に、義和団の乱を北清事変という規模、性格に於て終止符をうたしめるに至つた根本的な外的政治要因をなしていたとみなしうる点である。然りとすれば、²⁰太沽陥落し北京も亦「危殆旦夕に在り」という際、²¹劉張両総督にとつて「痛剿」への要望と併せて東南清地域に於ける秩序維持のための対応措置が焦眉の急務として痛感されるに至つたのも、蓋し首肯するに難くない。

5月22日^{6月18日} づけ張之洞の劉坤一あて打電は、²²ロシア部隊の漢口到着に刺戟された英国領事がイギリス海軍を長江に派遣して土匪弾圧に協力すべく申入れたのに対し、張之洞が①長江筋の治安維持には劉張両総督が全責任をもつ、②英国海軍の派遣は民間に驚擾を招き列国に乗ずべき口実を与え効尤せしめる結果となるから英国の自重こそが上策である。③劉張共に英国との連絡を要望する旨の3点を答えて謝絶したことを伝え、且つ、同日づけをもつて江漢関道に対し英国領事に同様趣旨の釈明を行うと俱に、両湖地方は張之洞が長江下流域は劉坤一が力任保護し、痞匪は即時撲滅する旨英国政府への転

達を乞うべく訓令²³を發し、ついで、25日には駐米公使伍廷芳にも米國政府に同様申入れ
 するよう電請²⁴、26日にも重ねて英米日駐在公使に打電する処があつたのであるが、劉張
 両者の東南清保全のためのかくの如き對外的働きかけには「力任保護洋商教士之責、
 以杜藉口窺伺為要²⁵」という明確な政治意図が底流していたのであり、然る所以には「沿
 江一帶には会匪塩梟安慶道友甚だ多く拳会と各自党を為す」という對内事情と「長江の
 商務は英國を重しとなす、各國覬覦すること已に久し……若し一國を觸動すれば勢必ず
 群起して聚攻せん」という對外情勢とが「外衅一開、内匪四起、更難措手」という構造
 でからみ合っていたが故に、北京も亦危しとされる北清の緊迫した情況下に於ける列強
 による東南各省の蹂躪は、彼等にとつて清末中国「全局の瓦解」を必至と予料せざるを
 得ぬ趨勢に事態を追込むと判断されたからである。²⁶

清末の会党については、陶成章「教会源流考」が、華北に於ける封神之伝を尊信する
 白蓮教系統と華中華南に於ける水滸伝を崇拜する天地会系統とに二大別して、前者に神
 拳教即ち義和拳と安慶道友会など、後者に広東を本拠とする三合会と長江流域に根拠す
 る哥老会をあげ、哥老会を更に洪幫つまり紅幫と潘家即ち慶幫即ち青幫と江湖団の三者
 に区分しつつ紅幫は湖北湖南から四川浙江一帶に、青幫即ち塩梟は江蘇安徽浙江江西な
 ど長江下流域に勢力を占めていたことを詳述し、平山周「中国秘密社会史」は三合哥老
 両会とも本来は反清復明を宗旨とする秘密結社であるとして、三合会が兩広福建一帶に
 遍伏する外、南洋植民地香港などに海外三合会が組織されていること、湖南浙江はじめ
 長江流域に蟠居する哥老会は盜劫賭博をこととはするが良民に対しては危害を加えぬ紅
 幫を正統とすること、元來、漕運労働者であつた青幫は私塩の販売と偷税を業とする非
 合法結社で塩梟、光蛋、安慶道友会がそれであること、この外、竊盜集團たる江湖団
 が黒幫、騙拐党が白幫とよばれていたこと等に言及している。右の両書の説明には多少
 の喰違ひが見受けられはするものの清末会党の輪郭についてはおよその理解は可能であ
 る。然かも、陶成章によれば、紅幫は湘營兵士内部に相当の勢力を扶植しており、そ
 れと青幫の暗通は清末官憲にとつて頭痛の種であつたらしい。とすれば、義和団の激甚
 な反帝排外暴動によつて北清が破局的危機に瀕しつつあつた當時に於て、絶対秘密を嚴
 守して鉄の團結を誇る反清的一大社会勢力たる哥老会が、列國利権の輻輳する「長江一
 帶地方ヲ根拠トシテ其数實ニ数十万ノ多キニ達シ其他ノ地方ニ散在スル党羽亦尠カラ
 ズ²⁷」という実状にあつたとしたら、劉張ならずとも彼等の動向に深甚の危惧を抱きその
 対策に腐心せぬのがむしろ不思議というものであらう。

然かも、劉張両者に於ける以上の情勢判断が可成りに正確な客觀的見透しであつたこ
 とは、例えば「我利益ヲ保護シ我勢力ヲ維持スルニ於テ敢テ他國ノ後ニ墜チザルヲ切望
 スル主旨」から上海長江警備のために警備艦の即時増派を日本政府へ要望した小田切領
 事²⁸が、その根拠を、目下の表面的平靜さにも不拘「蓋シ長江一帶地方ハ古來ヨリ匪徒ノ
 淵藪ニシテ哥老会連莊会ノ如キ各種ノ会合数十ノ多キニ上ルノミナラズ塩梟土匪亦各地
 ニ潜伏スルヲ以テ時機一到セバ彼等ハ直チニ隴畝江港ノ間ニ崛起シテ一大騷擾ヲ惹起シ
 或ハ外国商人ニ對シ或ハ耶蘇教師教堂ニ對シ或ハ地方官吏ニ對シテ危害ヲ加フルナキヲ
 保ス可ラズ、去レバ本邦ニ於テ單ニ北部ノミニ囑目シテ南部ニ對スル注意ヲ忽ニスル如

キ事アラバ他日噬臍ノ悔アルヲ免レザルベシ、南部ニ於ケル本邦商利ノ中心ハ長江一帯地方ニ在リ而カモ近キ将来ニ於テ匪徒ノ蜂起スルモノアリトセバ先ヅ指ヲ此地方ニ屈セザルヲ得」ぬからだといふ説した処からも傍証されると思う。何故なら、この小田切報告は、内擾と干渉の相互不可分にかみ合う長江流域の危機様相を、外ならぬ日本自身の政治経済的権益確保のためという観点から洵に鮮かに分析しているからであり、事実、前年以来、李雲彪、楊鴻（洪）鈞、張堯卿、李堃山（和生）顧鴻恩（辜洪恩）ら哥老会頭目に対して孫文派が興漢会の結成を企図し、唐才常らも彼等を「富有票匪」に組織して自立軍起義の軍事基盤がために奏功するという長江会党への動きが早くも展開されていたに於てである。²⁹ だから、5月27日の劉坤一張之洞王之春袁世凱盛宣懷らの「寄京慶親王榮中堂」が物語る通り、25日の宣戰論旨などは、彼等にとっては大局を弁ぜぬ暴挙以外の何物でもなく、却つて李鴻章を全権とした速やかなる挽救対策こそが祈求されざるを得なかつたのであるが、同時に、南清地域についても東南保護約款締結への動きが俄然活潑となり、28日には盛宣懷が李鴻章劉坤一張之洞に対し

「北事不久必壞、留東南三大帥、以救社稷蒼生、似非從權不可、若一拘泥、不僅東南同毀、挽回全局亦難」とうつたえ

「如欲図補救、須趁未奉旨之先、峴帥香帥会同、電飭地方官上海道、与各領事訂約、上海租界准歸各國保護、長江内地均歸督撫保護、兩不相擾、以保全商民人命產業為主」³²と東南互保を提唱するに至つたのである。

かくて、5月30日³³ 6月26日、盛宣懷、余聯沅らが会審衙門に於て上海領事団と正式交渉に入ることとなつたのであるが、小田切領事報告によれば交渉の開始には小田切が一役買つていたらしい。即ち、大沽陥落以後、南清官憲と列国官民との間に「危懼疑訝スルノ情」次第に深刻となるのをみた小田切領事が盛宣懷と密商して、5月28日³⁴ 6月24日 劉坤一張之洞あてに上海領事側の意向も「平和ヲ維持シ大局ヲ保全スルニ在リ決シテ他意ナキ」旨を伝えて清国側との協議を提案し「卑見若シ用ユベシトナセバ」首席領事たるポルトガル総領事に打電するよう申入れたところ、翌29日劉張両者から手配済みの返電があり、同日午後、上海領事団も領事官会議で交渉に応ずる態度決定を行つたとあるのがそれである。但しこの場合、小田切が恰も發議者たる如き語調で報告しているのは、上述に於ける劉張盛らの動きを、張之洞返電に「頃已電囑上海道及盛京堂」³⁵とあり、ベルギー外務大臣談話に「在上海白国領事ヨリ盛宣懷ノ談話ナリ迎、南京漢口広東其他中央及南部各省ノ総督ニ於テ此際中立ヲ布告シ外人ノ安全ヲ保鞏スルノ企テ有之、且李鴻章ハ仮政府組織ノ見込ヲ以テ不日上海ニ来ラントスル旨同日³⁶ 5月27日 來電ニ接シタル由」とあるのにてらして首肯し難い。ここにいう「中立」³⁷の政治的意味は「単ニ当国及外国ノ態度明白ナル迄ハ指定地ニ於テ戰鬭ヲ避クルコト」つまり非戰鬭地帯の暫時的設定という便法措置のいみにすぎなかつたようであるが、それにしても、当時の盛宣懷が小田切のみならずベルギー総領事にも働きかけ李鴻章の仮政府樹立の動きすら洩らしていたことは後論との関連に於ても注目されてよいであろう。然りとすれば、約款提起に至ることのありようは、危機の打開を「權に従うに非ざれば不可なるに似たり」とみた盛宣懷が、敢えて宣戰の論旨を無視して劉張李らの支持のもとに東南保護約款の締結を意図し、そ

の順調なる促進のために清末中国をめぐる国際政治面への配慮にたちつつ交渉相手たる上海領事団から日本の小田切領事を選んで活用せんとしたものであり、小田切も亦「本邦ニ利益アルヲ信ジ」³⁸て之に積極的協力を吝しなかつたのだと解釈するのが妥当と思う。

5月30日の交渉は、冒頭、余聯沅が「仮令ヒ如何ナル朝旨アリトモ敢テ之ニ従ハズ章程ヲ格守シテ平和ヲ維持スベシ」という強い意志表示を行つたのに対し、領事団側の反応は、原則的には「若シ長江一帯地方ニシテ平静無事ナルトキハ各国共ニ異常ノ挙動ナキヲ断言ス」というにあつたが、清国側から提示された章程草案を検討するに及び「不妥ノ点多キヨリ到底之ヲ議題トシテ直チニ会議ヲ開ク能ハズトノ意見多ク」「何等確乎タル協定ヲ見ルニ至ラズ」解散となり、翌6月1日の領事官会議に於て「两江総督及湖広総督ハ其特派代表者ニ依リ管内ニ於ケル秩序ヲ維持スルコトニ同意シ、本官等ハ右総督ニ於テ秩序ヲ維持スル限リハ之ニ干渉セザルコトニ同意ス」との確認決議を行いその旨を上海道に正式通報するにとどまつたのである。³⁹換言すれば、清国側の起案にかかる保護上海長江内地通共章程9条そのものは領事官側によつて拒否され、唯、第1条に集約された章程の根本趣旨のみが「秩序ヲ維持スル限リハ」という条件づきで承認される結果に終つたわけであるが、然る所以には、第5条の賠償問題に列国領事の異議が集中したこと以外に「若シ出来得バクンバ兩総督ノ管轄地又事情ノ許ス限リハ浙江福建広東広西雲南四川等ヲモ中立地トナスノ仮処分ヲ施行スベシ」との積極的主張をもつ仏国総領事⁴⁰などが、この章程案を承認すれば「開港場に於て騒乱が起るときは支那官憲は其の責に任じないのであつて却つて外国は総督等が外国人の生命財産を保護する限り其の管下⁴¹に於て一切軍事行動をしないと約束することになる」と難色を示したこと、日本政府の小田切領事への訓令にいう「中央政府トハ開戦ヲ宣告スル以上ハ…兵略上我ニ利益アル場合ハ何時ニ於テモ上陸若シクハ之ヲ利用スルノ自由ヲ有セザル可ラズ」とか「南清一帯ノ地方總督ヲドフワクトーガヴァメントト識認シタルノ嫌ナキ能ハズ」とかの理由から「断然相互対等委員ヲシテ共商セシムルハ不可」とする如き国際公法上の疑義、或は公使の戕害に痛憤する独逸領事や適用地域の拡大というフランス領事に較べ唯「異見ナキ」⁴²反応しか示さなかつた消極的な英国領事など列国領事側に内在する対清態度の差異が纏綿していたからであろう。⁴³

ところで、如上の交渉結果を不十分とみた清国側は、更に、余聯沅を通じて「将来ノ状況（北方ヲ意味スルナラン）如何ニ関セズ外国政府ニ於テハ揚子江沿岸ニ兵員ヲ上陸セシメザルベシトノ宣言ヲ保チ、又劉張二總督ハ其管轄区域内ニ於テ条約ノ規定ニ遵ヒ外人ノ生命財産ヲ保護スルヲ誓フ事ニ関シテ更ニ清国当局者ト各国領事トノ間ニ約定スル所アリタシ」との劉坤一の申入れを上海首席領事に送致した。だが、6月9日⁴⁴の領事官会議はドイツ領事の強硬な異議に阻まれて劉坤一の要請を拒否、つづいて盛宣懷からもたらされた5月30日の抗戦命令に苦慮する劉坤一が「6月27日（清曆6月1日）⁴⁵当地駐在各国領事ト劉坤一及張之洞ノ代表者トノ間ニ於テ締結セラレタル協定ノ批准ニ関シ關係各国政府ヨリ領事ヲ経テ正式ノ通牒アラシムコトヲ切望」⁴⁶する旨の重ねての要望も6月11日⁴⁷の領事官会議に於てまたも独逸領事に峻拒されたため、結局、日英米三国のみが個々の立場に於て本国政府の承認を得、之を劉張兩総督に伝達するというところで落着を告げた⁴⁸

のであつた。

以上が、保護上海長江内地通共章程の成立をめぐる劉坤一張之洞らと上海領事団との交渉経過の概略であるが、要するに、この約款は劉張両者の切望にも不拘、領事団による正式調印と各国政府の批准をうるには至らなかつたが故に法的には全く不完全な協定とせざるを得ない。然し、約款を貫く基本的政治目的は条件づきではあれ列国領事側の確認を得たのみか日英米三国政府の批准的手続きをもみたわけであるから、この約款が本来、破局的非常事態に対処せんがための権宜の措置であつた以上、その限りに於て、劉張両総督の提案意図は事実上殆んど達成されたとみて大過ないであろう。

であつたからこそ、かくして一応の成立をみた保護上海長江内地通共章程は、爾後に於ける北清の絶望的危機の深まりに反比例して、東南清地域に於ける急速なる敷衍拡大となつて展開し、長江流域蘇浙内地の秩序維持協定から文字通りの東南保護約款へと結晶するに至つたのである。

「閩浙總督浙江巡撫及山東巡撫ノ秩序維持協定ニ加入方申出報告ノ件」なる小田切領事報告には、右約款成立の直後、浙江巡撫が同意を表し、山東巡撫袁世凱と閩浙總督許應騤が同様処置すべく盛宣懷に打診してきたこと、然し袁世凱の場合は山東省に於ける独仏關係から協定成立は見込みうすであることが伝えられ、愚齋存稿³⁷ 卷「劉峴帥來電^{6月23日}」には粵省の加入斡旋かたの申入も報ぜられているのであるが6月18日^{14日}「互相保護約章」として成立する運びとなつた閩浙總督許應騤の動きにもその背後には盛宣懷の慫慂が働いていた。即ち、6月4日^{6月30日} づけ盛宣懷の「寄閩督許筠帥」に劉張両者と上海領事との交渉妥結を報じた後で「閩浙の海疆は同じく東南に在り、もし鈞處この弁法に同ずれば即ち三帥と電商し聯絡せよ、共に大局を保たん」と述べ、李鴻章劉坤一張之洞と連絡のうへ同一協定を締結すべきを勧め、6月7日^{7月3日} づけ「寄閩督許筠帥」で具体的弁法を勧告しているのが這般の消息を伝えている。

かようにして成立した互相保護約章の全文は⁵⁷

- 一 現在两江兩湖兩広安徽各督撫、与駐紮上海各国領事、商定彼此互相保護弁法、業經各国領事、電達外部、照允立約籤字、今福建省亦照此議、与两江等省、一律弁理
- 一 寄寓福建各国官商以及伝教洋人、所有身命財産、中国地方官、情願竭力保護、不使有損、廈門一体照弁
- 一 福建地方、倘有匪徒造謠意欲傷害洋人、中国地方官、即行認真拏弁、決不縱容
- 一 此次立約、係為互相保護中外人民商務産業、各無相擾起見、應声明以後、不論北方如何變乱、福建地方均守此約弁理
- 一 福州地方、甚為安靜、中国地方官、如能力任保護、則各国領事官、自應均允、詳請各本國水師提督、現在不必派兵船進口、以免民心驚疑滋生事端、至尋常游歷兵船、暫時来往、仍可照例弁理
- 一 所議各款、應請各国領事、電達本國外部存案、以昭慎重
- 一 此次約款、應繕華文^{英法}文各兩紙、本將軍本部堂与各国領事籤字後、領袖領事署存一分、洋務局存一分
- 一 約款字義、如有未明晰之處、應以華文為準

の8条からなっている。但し、福州領事豊島捨松報告⁵⁸によれば、この約款は第4条の英訳文が不正確で英仏訳文も全文7条にすぎなかつたが、各国領事とも「主意ニハ大差無之トテ」「其儘記名致タ」ものという。従つて、互相保護約章も法的には杜撰といわざるを得ないが、それも実は協定成立に対する各国領事の消極的態度、詳言すれば、6月10日^{7月6日}第1回領事官会議の際、「各国領事ハ何レモ重キヲ置カズ」殊に原案第5条の「福州地方甚為安靜、中国地方官力任保護、所有各国兵船、現在均不必進口、以免人民驚疑滋生事端」が「頗ル穩当ヲ缺ク」とされ、露仏独三国領事の異論で態度未決定に終つたこと、だが、英国領事の斡旋で日米領事が原案第5条の削除又は修正を条件に清国側の提案を受諾した結果、絶対拒否を表明した独逸領事を除き、6月14日^{7月10日}の第2回領事官会議で各国領事の賛同を得、6月18日^{7月14日}の広東俱樂部に於ける「記名」をみるに至つたこと、加之、約章成立の列国側推進者たる英国領事ですら、内心はともかく「此約条ハ之ヲ取結モ不取結モ別ニ重大視スルニ不及事ナレバ寧口之ヲ取結ビ以テ兩地方長官ヲ安慰シテハ如何」という斡旋態度でしかなかつたこと等に起因していたからだと思われ、ということは、逆に又、この約章に包蔵された清国側の政治意図が北方禍亂の推移如何にかかわらず東南清地域の保全をこそ基本目的としていた消息を物語つてると解すべきであろう。

現地に於ける交渉が開始されるや、清国側は直ちに6月13日^{7月9日}上海道を経由し閩浙總督許應麟の名儀で上海首席領事あてに福建浙江をも保護上海長江内地通共章程⁶⁰の適用範囲に包含する旨を通報し、ついで協定の妥結をみるや7月2日^{7月27日}の布告で「各国寄寓閩省官商教士人等身家産業、已經本部堂与各国領事商明、竭力保護、無論北事如何、閩浙仍照一律、各不相擾、以敦睦誼」なる趣旨を敷衍して一般に曉諭すると共に、とくに、「誠恐外来匪徒、瀝跡此間、希圖煽惑愚民、造謠生事、必須嚴拿究弁、庶足以示懲儆而資保衛」と要望する處があつたのである。

茲に、光緒26年5月30日^{1900年6月26日}劉坤一張之洞の委嘱をうけた余聯沅、盛宣懷らの提案による保護上海内地通共章程は6月1日^{6月27日}上海領事団から協定趣旨の原則的確認を得た後、6月18日^{7月14日}には閩浙總督許應麟と福州各国領事官との互相保護約章にまで拡大されて、湖北湖南江西江蘇安徽浙江福建廣東廣西の9省にまたがる東南保護約款となつて結実し、ついで、6月25日^{7月21日}づけ「两江總督劉坤一奏統籌大局摺」で

「臣等遂乘各領事來商保護商教之時、曾飭江海關道余聯沅、与之訂定章程、沿江一帶及蘇杭内地、各国如不侵犯、我当照常保護、經各領事電商各外部、臣等亦電各使臣、向各国切實声明、德国戕使頗持異議、嗣後各国牽制、遂亦帖然就範」(光緒朝中日交涉史料) 卷54 3894との事後報告が行われ、北京政府から正式承認をうけるに至つたのである。

北清の非常事態に対処して東南清地域を自己の管轄下に確保しつつ、外衅と内匪との相互因果による致命的紛擾の誘発を防遏し、以て清末中国の全面的瓦壊を回避しようとする劉坤一張之洞らの反帝的防衛志向は、彼等が秩序を維持する限りはという条件つきながらも列国の不干渉を領事官側に確約させ得たが故に、義和団の乱裡にある清末中国東南地域の運命を帝国主義的分割支配から防衛せんがための公的保証をとりつけ得たという国際政治的意味に於て、確かに無視するを許さぬ収獲があつたとしなければならな

い。従つて、この約款のもつ政治性格は、形式上は東南互保つまり中外互相保護章程であつたとは云え前述した仏国総領事の指摘についてのコルヂェーの説明の通り、実質的には所詮、東南保護約款であつたと規定づけられて然るべきではあるまいか。

3 約款をめぐる劉坤一と張之洞

東南保護約款が一応の成立をみるや、張之洞は、直ちに、この約款が「相機審勢、保全疆土」の論旨を体した「保衛地方百姓身家性命之至計」であること、告示公布以後に於ける不祥事件は悪質デマや租界教堂襲撃暴徒は土匪会匪なみに、匪徒の騒擾には痛勦を、兵勇差役の擾害は軍法にてらして、それぞれ処断する旨を「切切特示」⁶²し、劉坤一も亦、同様告示を発するとともに、その管轄地域を軍事的見地から、江海要隘地区、沿江漢口地区、内地州県地区、淮安徐州地区に区分して陸海兩軍の大幅な改編補強と団練整備を行い、更に安徽江西巡撫と軍事的連絡を緊密化しつつ「もし敵人の貿然侵犯するあらば必ずや將士を激励して奮勇堵撃」⁶³し以て「聖主諄諄誥誡禦侮保疆之至意」に副わんことを期した⁶⁴のであるが、約款成立前後の長江流域の実情がいかに陰にこもつた不気味さをみなぎらせていたかに就ては、例えば

「漢口市内ノ民心ハ唯々戦々兢々トシテ何時何事ノ起ランモ計リ難シトノ感念ヲ以テ満タサレ少シモ腰ノ落付カサル有様ナリ、外国商店ニ雇ハレ居ル支那人ノ如キ夜中ハ其商店ヲ去リテ其家ニ歸泊センコトヲ乞フモノ次第ニ多ク、市中ニ於ケル貨物ノ売買ハ一切現金払ニシテ信用取引ハ殆ンド行ハレズ金利ハ益々高く金融ハ益々逼迫シ汽船ノ積荷ハ上下共皆無ノ姿ニシテ何人ト雖モ此行末ノ如何ヲ思ヒ煩ハサルモノナク、若シ之ニ加フルニ本夏旱魃ニシテ農産物不作ナルガ如キコトアラバ到底地方ノ安寧ヲ保持スル見込ナク国内大乱ニ至ルヘシトテ大ニ杞憂スルモノアルハ決シテ偶然ニアラサルナク」と報告された漢口の状況や、南京城内外に貼布された。

「本帥所統神兵、不日由京到寧、先将教堂燒去、次將電桿燬尽、郵政報房學堂、自當一律掃淨、兵到南京之後、平民不要虛驚、神兵逐尽洋人、從此天下安寧、兵丁一切食用買賣亦須公平、衙署洋關不毀、依然繳稅徵金、平民不違約束、立時明正典刑」⁶⁶という不穩な匿名文書、乃至は上海領事団による次の布告⁶⁷

Qwing to the troubles in the north, many rumours have been circulated in Shanghai which have unsettled the minds of the people. In their ignorance of the true state of affairs they have frightened themselves and each other : and in fleeing home wards from Shanghai have in many cases fallen a prey to robbers. We the Consular Body at Shanghai have consulted with the Chinese Authorities regarding the protection of life and property in the neighbourhood and have agreed to act in co-operation in putting down any disturbance that may occur. The municipal council holds the Volunteer corps in readiness for the protection of the settlement and our war ships have taken up their positions in the river for the same purpose and for that alone. With such precautions both on shore and afloat and with the Cardial

co-operation of the Chinese Authorities. there is no reason with the troubles in the North need spread into these Parts. There is no cause for alarm and we hereby give notice to all that the presence of foreign men of war in the river is only a measure of precaution for the protection of the settlement and that there is no foundation of truth in the idle rumours with which many persons are now exciting themselves.

などを前節でふれた長江会党の動静に併考すれば容易に想見出来るであろうし、従つて劉張兩総督が「寝食ヲ忘レテ」⁶⁸対策に腐心したというのもあながち失当の誇詞ではなかつたであろう。

この間に処する劉張らの動きとしては、①北京政府に対しては義和団を邪教乱民土匪劫盜と断じてその剿滅を祈望しつつ同時に李鴻章の速やかなる起用による和平措置を要請し、⁶⁹②日英米三国をはじめ各国にむかつては南清督撫の抱く平和維持への決意を表明して諒解工作を試みる一方李鴻章の北上まで宣戦布告を行わぬよう懇望し、⁷⁰③劉張両者と李鴻章の間では榮祿との連絡のもとに北京政府の現状を目して端郡王の独裁政治と断定して「国家ノ秩序平常ニ復シ西太后皇帝ガ其ノ権力ヲ回收スルニ至ル迄ハ縦令ヒ詔勅ト雖モ遵奉セザルコト」の申合せをなし、⁷¹④各自総督の管轄地域に就ては劉坤一の塩臬徐老虎対策や上海知県の取締り告示に伺知出来る通り懸命な治安対策を講ずるという和平志向に貫ぬかれた内外に亘る多角的活動の展開が指摘されるのであるが、そうした彼等の態度は東南保護約款の成立をみるに及んで更に確乎たるものとなつていつた。

6月30日⁷² 6月4日⁷³ つけ瀬川領事報告は「張劉兩総督ノ如キハ北方ニ於テ仮令ヒ外国ト戦端ヲ開クトモ揚子江岸各地ハ泰然トシテ独立シ外人ヲ保護シ其平和ヲ維持スルヲ以テ大主義」としていること、特に張之洞が「如何ニ北方ノ形勢ハ変ジ行クトモ南方ニ於テハ飽迄外人ト親和スルヲ以テ主義トシ此主義ニ於テ南北相一致セザルトキハ南支那ト北支那ハ相分離スルトモ此主義ヲ貫徹セザレバ止マズトノ意気込ヲ抱キ居ルモノノ如クニ相見ヘ候」ことを伝え、且つ劉張両者が「匪徒平定外人保護ヲ以テ其宗旨トナシ」「此主義ヲ貫徹スル為メ同一ノ方向ニ従ツテ針路ヲ取」つた点に注目しているが、劉張両者のかような態度が対外的に「此際揚子江岸ノ地ヲ諸外国ニ占領サレン事ヲ最モ恐レ居候如ク」⁷⁵とみられる防衛意識を底流せしめており、それは裏返せば「外国兵ノ揚子江ニ進入スル時機ハ該二総督ガ外人保護ノ責任ヲ卸スノ時機」という反帝的抵抗決意に外ならなかつたことは贅言を要しないとして、とりわけ、我々の関心をひくのは「榮祿等ト相結托シ時機ヲ見テ光緒帝ヲ宮中ヨリ救ヒ端郡王一派ヲ排斥シ兼テ今般ノ事変後協同一致ノ運動ヲナシツツアル山東巡撫袁世凱兩広総督李鴻章等ト共ニ力ヲ合シテ一大革新ヲ実行セントスルノ意アルニアラザル歟ト想像」⁷⁶される「革新」志向を内在せしめていたという事実である。

劉坤一の抱く内政志向については「劉総督ノ信愛スル」前上海関道蔡鈞を通じて

「劉総督ハ北方ノ事変裁定後端郡王剛毅董福祥等ヲ相当ノ懲罰ニ処スルノ必要ヲ認メ且ツ政府ニ榮祿及同臭味ノ人物ヲ糾合組織スルノ可ナルヲ称道セリ、劉総督ハ事変裁定後ハ皇帝ノ親政ヲ仰グ意見ナルモ之ト同時ニ皇太后ノ一身ニ対シテハ何人ト雖ドモ容易

ニ手ヲ下サレザル事ヲ希望セリ、蓋シ皇太后訓政数十年ニシテ恩ヲ樹ニル深ク沢ヲ敷ク
 広シ、今日当國ノ重職ニ在ル者一トシテ太后ノ栽培ヲ蒙ラザルモノナシ、若シ万一太后
 ノ一身ニ對シ不躋ノ事アル時ハ人心ノ動揺ヲ來シ事變ノ醞釀ヲ見シ為メ總督ニ於テハ此
 希望ヲ有スルモノナリ、劉總督ハ皇帝皇太后ニシテ端郡王ノ為メ幽閉セラレ又兩宮ノ身
 ニ對シ匪徒危害ヲ加ヘ或ハ皇太子新タニ帝位ニ上ル場合ニハ政府ノ命令ヲ遵奉セズシテ
 相当ノ処置ヲ執ルハ論ヲ俟タズト雖ドモ、万一端郡王等ガ皇帝皇太后ノ名ニ於テ總督ノ
 職ヲ免スル如キ事アラシメバ總督ハ自身ノ進退甚ダ困難ナルヲ感ズル」旨が小田切領事
 に伝えられ、張之洞の「真意」に関しては、二〇領事が道台喪良から「總督ノ極意ハ此際
 現政府ヲ打倒シ純然漢人ヲ以テ新政府ヲ組織スルカ或ハ同志ヲ以テ中央支那ノ獨立ヲ計
 ルカノ二点ニアリシガ結局今少シク北京政府ノ真意ト京畿ノ實狀ヲ明カニシタル上ニア
 ラザレバ処決ニ便ナラザルモノアリト、今其一ヲ聞クニ張ハ現政府執權者ハ先ヅ論外ト
 シ李鴻章王之春ノ露ニ結托ノ縁ハ今ニ於テ絶タント欲スルモ絶ツ克ハザルモノアリ、袁
 世凱ノ表裏反覆常ナキアリ、李秉衡ノ頑迷專意排外的ナルアリ、而シテ此等ニ附随スル
 モノ随分夥多ナレバ最モ慎重周密ノ計劃ヲ要ス、故ニ今後ノ再會ニ於テハ是非小官ニ會
 見ヲ望ム」という6月上旬^{7月}_{上旬}の武昌に於ける張之洞幕賓會議の秘密情報をうけてい
 るのが、当面、恰好の手びきとなろう。

何故なら、この二報告によつて我々は、①劉張両者が端郡王政權の全面的否認に就て
 は完全に一致してはいるものの、②樹立さるべき新政權のありかたに関しては、(イ)劉坤
 一が西太后の安泰を必須条件とした光緒帝の親政による改革という清朝支配体制の修正
 派的維持論であつたのに対し、(ロ)張之洞の場合は北京に於ける漢民族政府の樹立か、華
 中に於ける漢民族獨立革命の實現かという清朝支配体制の否定的志向にたつ民族主義的
 急進論であつたが然し、結局、北京政局の推移と東南清督撫の複雑な政治動向とを慎重
 に静観することに決定したという注目すべき事実を指摘出来るからである。

然かも、当時一般に「北部ニ於テハ端郡王及剛毅等ノ下ニ排外守旧ノ一団体ヲ作り、
 南部ニ於テハ劉張等ノ下ニ一団体ヲ作ルニ立至リ候時ハ行ク行ク此等新旧二大団体ノ衝
 突ハ免レザル事ト相信シ候」とか、錫良于陰霖北上の動きを目して「南部諸總督ハ此際
 北送ノ兵士ヲシテ機會ヲ見計ラヒ光緒帝ヲ救出サンムルノ計略ニ出テタルモノ歟ト被存
 候」⁸¹とかの外部観測が公然と行われていた客觀情勢であつたことを思えば、右にいう劉
 張両者の真意のありかたは、前掲の瀨川領事報告にてらし捨て難い機微の消息を伝えて
 いると判断されるのであり、とすれば、起義を劃策しつつあつた自立軍グループが劉張両
 者に対して後述の如き働きかけを試みるに至つたのも蓋し所以なしとしない。換言すれ
 ば、東南保護約款成立前後の劉坤一張之洞とくに張之洞は、長江流域を根拠地として北
 京に對抗する漢民族獨立革命政權の實現をも密かに企図していたというのであるから、
 当時の危機情勢に鑑みれば、約款提起にまつわる彼等の政治意図には清朝政府への絶対
 忠誠のためと云わんより、むしろ、北清は列國に蹂躪され終ろうとも東南清地域だけは
 帝國主義的分割支配から防衛して清末中国植民地化の悲劇を回避したいという反帝的民
 族抵抗志向が底流していたとみて宜しいのではあるまいか。少く共、張之洞の場合はか
 く解釈して然るべきであらう。にも不拘、劉張両者が、結局、自立軍グループと明確な

一線を劃する方向へ踏み切るに至つたのには、東南保護約款をめぐる日英両国をはじめとする国際政治面からの外的影響の介在は後論にゆずるとしても、戊戌政変以来の劉張両者の政治的ありかた、例えば、所謂立儲廢皇事件の場合や近衛篤磨「張總督再会見記」⁸²にいう劉張人物批評、乃至は清議報にいう⁸³

「劉坤一者為義不終者也弱也，李鴻章者依違兩可者也猾也，張之洞者敢于無君者也賊也，是三人者，一則氣魄不足，一則趨避太熟，一則心術最壞，心術最壞者其為賊不易見也」⁸⁴との品評を、張季子九錄⁸⁵ 卷7「年譜」26年5月の条に

「与眉孫愛蒼塾先伯嚴施理卿炳燮，議合劉張二督保護東南，余^(張)詣劉陳說後，其幕客有沮者，劉猶予，復引余問，兩宮將幸西北，西北与東南孰重，余曰，無西北不足以存東南，為其名不足以存也，無東南不足以存西北，為其實不足以存也，劉蹶然曰，吾決矣，告某客曰，頭是姓劉物，即定議，電鄂約張，張応」とある劉坤一の東南保衛態度や、小田切領事「劉張二總督ノ進退」⁸⁶が「張總督ノ身ニ関シテハ種々ノ風説アリテ過般モ其筋ニ対シ長江保護ノ約ハ本ト臣ノ意ニアラズト上奏セリト云ヒ，又同總督ニ親近ナル人物ヨリ總督ハ皇帝皇太后ニシテ世ニ在ル時ハ如何ナル上諭ヲモ遵奉スルノ意思ナル旨聞キタリト云フ者アリテ總督ノ心事何トナク浮動不定ナルガ如シト雖ドモ是レ畢竟總督处世ノ方針ト憂國ノ衷情ヲ解セザルモノナリ」と張之洞の微妙な心境にふれつつ「蓋シ總督ハ自己ノ進退ハ自國ノ浮沈ト關係アルヲ知ルガ為メ無知大臣ノ舌鋒ニ罹リ頑愚御史ノ彈章ニ逢ヒテ自己ノ地位ヲ失脚スルヲ憂フルコト殊ニ切ナリ，是ヲ以テ政府ニ対シテハ往々空言ヲ敷衍シテ自己ノ地位ヲ鞏固ニスルノ方針ヲ把リ，他ノ一方ニ於テハ自己ノ所信ヲ漸々逐ヒ施行シツツアルハ過去ニ於ケル總督ノ処措ニ徴シテ之ヲ知ルベシ」と好意的説明を加え，だが「此二年間ニ於ケル總督ノ名望適カニ劉總督ニ及ハザルモノアルハ是レニ職由スル」ことを認めているのに考量すれば，劉坤一の政治的発言力が強くリードしたものともみて大過ないであろう。

とは云え，北京の危殆が目捷に迫ると劉張兩總督の焦慮は深刻となつた。この間の事情は，7月1日，劉坤一，張之洞，許应騫，奎俊，善聯，綽哈布，德寿，魏光燾，劉樹堂，王之春，袁世凱，聶緝槩，端方の連署で，李鴻章に交渉全権を委ねて「京防」対策あるべきを奏摺した際に⁸⁷

「就近在上海与各国電商，藉探消息，察其意向，緩其進兵，何国有隙可乘，即由何国入手，總以間敵謀紓国難安兩宮為主」⁸⁸

とうつたえ，又，瀨川領事が「北京ノ形勢如何ニヨリテハ南部各地ノ民心モ一時ニ動揺ヲ起ス」ことを懸念しながら「張總督ノ如キモ此頃來聯合軍北進ノ狀況ト皇帝及皇太后并ニ諸外国公使ノ安危ヲ思テ非常ニ頭腦ヲ悩マシ連夜殆ンド安眠シ能ハサル程ナリトノ事」と活写している処からも探り得られるが，7月21日の北京陥落という最後の關頭に追込まれるに至つて，遂に，劉張両者は重大決意を固めざるを得なくなつた。

かくて，7月22日^{8月16日} 劉張兩總督は上海^{英仏露独米日} 各国領事にむかい

「英法俄德美日本各国領事，頃接烟台電，聯軍十九挺通州，擬攻東直門等語，查現在並未得俄兩宮出京確信，如聯軍果攻京城，礮火所至，勢必震驚宮禁，万一有意外之危險，全国人心憤激，從此將不知禍之所止，況南方保護之局，各督撫均係奉旨弁理，儻各国不

顧兩宮，則何以處南方之各督撫，萬望貴領事飛電聯軍各兵官，切實詢明如何弁法，萬萬不至驚震我皇太后皇上之實地，使南方各督撫及各省民心不至激成大變，務望二十四點鐘內電復，萬急至盼，劉坤一張之洞電二十二日」⁸⁹

と「萬萬わが皇太后皇上を震驚するに至らざる實地」についての即答を「惘惘」的に要求するに至つたのである。⁹⁰

この電請は当時小田切領事が「一ハ萬一聯合軍ニシテ清国皇太后及皇上ノ身上ヲ顧念セズ不慮ノ變アルヲ見ルニ至ラバ南方各總督巡撫ハ外国ニ對シ戰ヲ開クベシ，換言セバ二總督ノ「アルチメータム」トモ見ルヲ得ベク，二ハ南方ノ諸總督及巡撫ハ事變發生以來全力ヲ注イデ民心ノ鎮撫ヲ計リ在留外国人保護ノ任ニ當レリト雖モ若シ皇太后皇上ニシテ不慮ノ變ニ遭遇セラルルコトアラバ南方ノ民心ハ為メニ大變ヲ激成シ，延テ在留外国人ノ性命ニ危害ヲ及ボスコアルモ彼等ニ於テ其責ニ任ゼザル旨ヲ予告スルノ意ナルヤモ測リ難シ」と二様の解釈をくださったのに徴しても察知される通り，如上の経緯をへた劉張兩總督のまさに捨身の反帝的抵抗姿勢であつたと評価出来よう。

翌日，右の要請にこたえて日本政府から兩宮保護の保証をうけると，劉張両者は之に感謝の意を表しながら

「英法俄德美日本各国総領事，昨電請貴総領事，飛電聯合軍，不致震驚兩宮，急盼兩日復電，係天下臣民急切盼望之意，並無他意，頃接出使大臣電，各外部語意均甚好，並接出使日本李大臣電，日本政府已允保護兩宮，思想各国篤念邦交，用意亦相当同，是兩宮可以平安，南方各督撫聞之万分感慰，東南保護之約，各督撫必當尽力自任，請速電貴国政府知照為感，劉坤一張之洞同電，二十三日」⁹¹

と前日の電請の真意の釈明と東南保護約款の誠実な履行を表明し，ついで26日には各国政府に対しても同様釈明すべく駐派公使あてに打電する処があつたのであるが，以上によつて，聯合軍の北京占領に最後の決意を固めた劉張兩總督捨身の切札が，外ならぬ東南保護約款の遵否如何，つまり，列国による光緒帝西太后の安泰の保証と引換えに東南清地域の秩序の維持を列国側に確約するが，然らざれば東南諸督撫の正式開戦か，又は一般民衆の反帝的排外暴動を以て報いようとするにあつた点は否定すべくもない事実であり，ここに東南保護約款は，列国聯合軍の帝国主義的外圧によつて清朝の命運まさに風前の燈という劇的瞬間に於て既得權益の保持に汲々たる英国はじめ帝国主義諸国の虚をつき，その包蔵する政治的本質を最高度に發揮するに至つたというべきであろう。¹⁴⁵

保護上海長江内地通共章程や互相保護約章の具有する所謂東南互保の政治的意味は，それが単に東南清地域に於ける政治経済的「中外互相保護」を企図していたということ以上に，究極的にはかくの如き清朝それ自身の存亡の運命に直結していたという側面に於て把握されねばならないと思う。

そして，劉張両者の真摯な約款遵守の結果は，事実「抑モ劉張兩總督が今日揚子江筋ノ重鎮トナリテ諸外国ノ信用ヲ博シ居ル所以ノモノハ今夏以來一旦宣言セシ宗旨ヲ確守シテ揚子江一帯ノ土匪ヲ剿定シ能ク外人ヲ保護セシ結果ニシテ」⁹³と賞讃される迄の成果を示したのであつた。

然りとすれば，義和団の乱を北清事變の規模に喰いとめ得た一要因として，東南保護

約款が演じた政治的役割の比重には、確かに我々の無視すべからざるものがあつたとみて宜しいであろう。

然かも、この場合、とりわけ注目に値する事実は、この東南保護約款が自立軍起義弾圧のための政治的支柱となつていたと見做しうる点である。

周知の通り、自立軍起義は北京陥落後7日の光緒26年7月28日^{1900年8月22日}張之洞らの弾圧のもとに首謀者唐才常以下20数名が処断されて事前に敗れさつた事件であるが、東南清督撫を通じて公示された查拏自立会匪示、⁹⁴上海道を介しての在滬各国領事に対する富有票会及自立会徒姓名の通報と捕縛協力の懇請、⁹⁵留日学生界を対象とした駐日公使あて勸戒上海国会及出洋学生文の送致、駐英公使に対する南洋華僑戒飭令、⁹⁶英国外務省に対する新嘉坡香港総督と駐清領事の匪党查禁協力かたの要請など、⁹⁸北京政府が即時に嚴重な取締態勢を施いたのに徴しても、この事件が清朝側にとつて如何に深刻な衝撃を与えたかは想見するに難くない。

但し、自立軍起義の経緯については、貧しいながら私も曾て考察を試みたところであり、⁹⁹最近では又、「梁任公先生年譜長編初稿」に起義をめぐる康梁派の動きに関する新史料が可成り豊富に収録されてもいる様であるから、ここでは唯、当面の課題との関連に於て、張之洞らとのむすびつきに焦点をしぼつて論及するにとどめたい。

自立軍グループが張之洞劉坤一に働きかけた事実は、宗方小太郎の東亜同文会宛密信¹⁰¹に「支那事件モ大問題トナルベク予等同志ハ汪康年ヲ密使トシ劉坤一張之洞ニ説キノ版図ニ割拠シ都ヲ武昌ニ移サン事ヲ計画中ナリ」といい、瀨川領事報告に「上海ニハ革新主義ヲ懷抱セル一味ノ党派アリテ曾テ南方総督ヲ遊説シタリトノ事ナルモ李劉張ノ如キ何レモ其説ヲ容レサリシ由ナレバ」とあり、且つ、黄中黄「沈蕙」第二章沈蕙之略歴及庚子事変の叙述や清史紀事本末「自立軍之失敗」乃至は馮自由「中華民國開国前革命史」第11章の「擁張独立之破裂」に併考すれば否定すべくもないところであり、その時期も光緒26年5月末から7月初めにかけてのことと思われる。

とすれば、前述した二口領事報告にいう張之洞の「真意」なるものが、自立軍グループとのこの交渉事実に無縁であつたとは到底考えられないし、又、両者が結局「狐疑莫能自定、才常以之洞無復可望、乃示絶於之洞」¹⁰⁴となつた事情も、張之洞自身に就て云えば、¹⁰⁵恐らくは6月7日から17日にかけての武昌に於ける朱滋沢、爽良ら張総督幕賓秘密会議の結果であつたに相違ない。のみならず、張之洞の自立軍グループに対するかかる態度決定には東南保護約款をめぐる列国とくに日英両国の対清動向が大きく影響していた事実を逸し得ない。

既述の通り、約款の正式批准が劉張両総督の切望にも不拘、上海領事団に拒否されたのは6月11日のことであつたが、この間に於ける劉張両者の政治的苦慮に就ては今更再述を要しないとしても、張之洞に於ける如上の「真意」のありかたは、時期的にみても、この東南保護約款の批准にからむ事情を抜きにしては考えられない。然かも、自立軍起義には戊戌政変以来の因縁から日本朝野につながりをもつ康梁派が指導勢力として活動していたのみか、¹⁰⁶康有為には更に英国との結びつきも推測され、げんに「向海外華僑募款函件 光緒26年6月20日」のうちに英国の援助を期待する旨をうつつたえている有様であつて

みれば、張之洞にとって日英両国の対清動向は自立軍起義との関連に於ても由々しい関心事であつた筈であり、自立軍グループや孫文派の動きが長江会党と不可分に結びついて恐るべき現実を醸成しつつあつた以上、劉張両総督が内援と干渉とを一体的に把握してその対策に苦慮したのは洵に無理からぬものがある。

とすれば、日英両国政府から友誼的に保護上海長江内地通共章程に関する正式承認を獲ち得たという事実は、彼等にとって国際政治面に於ける貴重な成果と云わねばならず、同時にそれが張之洞の対清朝、自立軍態度決定のための重大な外的要因たり得たわけである。そして又、茲に私は、劉張両総督が盛宣懷を介してかねて面識のある小田切領事を約款提起のための列国側の協力者たらしめた外交的意図の一根拠を見出したのである。¹⁰⁷

かくて、爾後の張之洞は、瀬川領事の所謂「李鴻章ノ如キ劉坤一ノ如キ張之洞ノ如キ何レモ深ク皇太后ヲ崇敬致居候ニ共康有為ノ一派ハ云フニ及バズ上海ノ新党派ノ如キ密ニ皇太后ヲ崇敬セザルノミナラズ寧ロ此人ヲ政治界外ニ擯斥セントスルノ希望ヲ抱キ居ルモノナレバ彼等革命党ト南方総督ハ已ニ此大方針ニ関シテ同一ノ進路ヲ取ル事能ハサルモノト相信ジ候¹⁰⁸」という方向、つまりは、劉坤一と同一歩調にたつ東南保護約款の誠実なる遵守へと踏み切り、遂に「張之洞及劉坤一カ右等暴動鎮撫ノ為メ挙行シタル嚴重ナル措置ニ依リ揚子江沿岸ノ地方ニ於テハ最早紛擾ノ虞ナカルベシ¹⁰⁹」という自立軍起義弾圧の当事者たるに至つたのである。

事情かくの如くであつたとすれば、事件直後の清議報が

「如張之洞者、巧处乎新与旧之間、善存于中与西之際、弥縫于君与后之事…（中略）…其本源專為保富貴藏身家之私、其附会遂幾成為滅中国殺人民之事、盖奸人之尤、無耻之極、巧詐之甚、至于張之洞而無以復加矣¹¹⁰」とか

「政変以来至今歲北京破後之張之洞、乃榮祿諸人之嬖人、而守旧朝廷之奴隸也¹¹¹」などと、殊更に張之洞を論難してやまなかつた所以も首肯されうる処である。

西太后政権の絶対否認のうえに光緒帝の迎立による立憲君主政体の「新造自立之国」を東南清地域に樹立しようとした保皇維新の自立軍起義は、日本の倒幕運動に自らを比定した唐才常の企図も空しく、北京陥落の直後に於て、東南保護約款に支えられた劉張両者の

「各省人心不靖、会匪伏莽、時有蠢動、兼之康有為党羽、分布各处、造言煽惑、尤属可慮、臣坤一之洞、聯絡各督撫、竭力防維、總期隨時撲滅¹¹²」
という憚る処なき弾圧の前にあえなくも潰え去らざるを得なかつたのである。

4 李鴻章の動き

両広総督李鴻章に対して、徳寿を後任にすえ迅速に北上すべき論旨が伝達されたのは、光緒26年5月19日^{1900年}のことであつたが、香港領事上野季三郎あて李鴻章の「各国公使へ伝達方依頼状¹¹⁴」によれば、当初、李鴻章は6月1日、エムプレスオブインディア号で香港から呉淞に赴き、そこから招商局汽船広利号で北上する予定であつたらし

く、事実、5月21日¹¹⁶ 6月17日 広東を出発、翌22日、香港総督ブレイクを訪問、2時間に亘つて北上後の列国交渉に関する打診を行い、ブレイクの広東総督留任勧告にこたえて勅命には違反出来ぬこと、広東の治安維持には後顧の憂いがないこと等を告げたというが、その直後、突如として予定を変更し、山東巡撫袁世凱を通じて広東在任を希望、北上見合せの態度にでた。¹¹⁶ 然し、留ること1ヵ月、6月12日、北洋大臣直隸総督に任命され猶予することなく北上すべきを督促されるに及び、李鴻章は6月21日¹¹⁷ 7月17日 招商局安平号で広東を出発、翌22日、香港総督ブレイクに挨拶、25日上海に到着したのであつた。ところが、この李鴻章の北上に対する英米側の反応は極めて冷淡で、上海到着当日、在留民の出迎者が皆無であつたばかりか、李鴻章排斥運動の企てすらするという嫌悪ぶりであつた。

小田切万寿之助領事はその理由について¹¹⁹

- 一 李総督ハ過去数年間何故カ英人ニ対シテ反抗ノ態度アル事
- 二 李総督ガ両広総督トシテ永ク粵東ノ重鎮ニ坐シ同地方ヲ鎮撫スルノ適任タルニ朝命ヲ奉ジテ北上スルハ英人ニ於テ不快ニ感ズル事
- 三 李総督ハ直隸ニ転任セリ而シテ直隸ハ目下交戦地タルヲ以テ総督ニ対シテ礼遇スル必要ナキ事
- 四 李総督ト屢次会見スル如キ事アル時ハ劉坤一等ノ猜忌ヲ来シ南方ノ一致ヲ破ルヘシトノ想像ヲ懷ク事

の4条をあげ「少シク偏見ノ嫌ナキニ非ザルカ」と批判しているが、三についてはともかく、一と二に就ては李鴻章が榮祿袁世凱らと緊密な連繋があり、且つかくれもない親露派であつた点を、当時の北京政府が主戦派たる端郡王一派に占められていた実情と清末中国をめぐる英露の対抗関係に考量すれば理解に困難ではなく、四については後論のうちにその具体的意味が闡明されていくであろう。さて、上海に到着したものの、李鴻章は北京政情の至難さを看取したため、6月27日¹²⁰ 7月23日 の北上督促にも不拘、時機を觀望すべく折からの病気を理由に暫く上海に滞留することにきめ、その間、7月13日¹²¹ 8月7日 の和平交渉全權大臣の任命をはじめ数次に及ぶ北上督促をも黙殺して「先清内匪、再退外兵」の路線を堅持しつつ、6月21日と28日の上諭に則して四個条の「共籌補救之策」を劉坤一と会奏したり、日本を動かして列国に停戦和議をよびかける等劃策する処があつたのであるが、7月21日の北京陥落を契機に李鴻章の態度は一段と積極化し、日本側の慫慂によつて慶親王榮祿李鴻章劉坤一張之洞を全權とする和平交渉を提案し、自らも8月15日づけの「俄艦に借乗して天津に駛赴すべし」という電諭と17、19日の電諭を遵奉して、遂に8月21日¹²² 9月14日、安平号に搭乗、太沽むけ上海を出発、27日には露国領事のみのお迎えをうけ、露国軍隊護衛のもとに天津に到着、講和準備を整えた後、閏8月18日¹²³ 10月11日 北京に乘込み、ここに愈々辛丑和議が本格的議事日程にのぼることとなつたわけである。

因みに、李鴻章の上海出発をめぐつて注目されるのは、小田切領事の詳細な報告の如く、日本政府からの自重要望にも不拘、李鴻章が北上の牢固たる意志表示を行い、然かもそこに「露国ノ後援ヲ恃」む李鴻章の心情が明白に看取された点と、李鴻章の北上護

衛のため吳淞に露艦が繫泊され、李鴻章自身、盛宣懷蔡鈞劉学詢らの諷諫を馬耳東風視していた処、劉坤一から日本軍艦の護衛が妥当である旨警告された結果、出発直前に至り英国旗をかかげた安平号で太沽にむかつたという点である。このささやかな現象のうちにも、我々は、北清事変をめぐる列国間の相互矛盾の微妙さと李鴻章と露国との結びつき乃至は、東南清督撫間に於ける劉坤一の声望をよみとることが出来るかと思う。

さて、如上の李鴻章の動静過程にあつて、就中、重要なのは李鴻章と香港総督ブレイク Blake との交渉事情に就てである。

というのは、兩者のかかわり合いのしかた、殊に香港総督の李鴻章広東留任勧告の態度には、その背後に孫文の所謂庚子惠州の役の一環たるシンガポール行の動きがからんでいたとみられるからである。

当時、孫文は同志と共に5月12日^{6月8日}横浜を出発、自身は香港、西貢へと直航したのであるが、宮崎寅蔵、内田良平、清藤幸七郎の3名は孫文代理として香港から広東に赴き、李鴻章代理たる劉学詢と所謂狐狸の瞞し合い交渉を試み、軍資金数万をせしめて香港に引返し、平山周、陳少白らと打合せた後、康有為との合作実現のためシンガポールに急航したのであつた。

ところで、何故、宮崎らが劉学詢と密会するに至つたかと云えば、その直接動機は孫文の日本出発にさきだち劉学詢から李鴻章が広東独立計画に孫文の協力を希望しているから至急来粵して欲しいとの招請があり、之に対して孫文が李鴻章の真意を疑惧した¹³³のによるのであるが、馮自由によれば、ことの由来は香港議政局員で孫文の知己たる何啓が、総督ブレイクと協議のうへ、中国日報の陳少白に対し義和団の乱に乗じて興中会が李鴻章と結んで両広の独立を宣言すべきを勧め、その方法として孫文らが香港総督に援助懇請の陳情書を提出、その意を含んだブレイクが李鴻章に両広の独立を促すと同時に孫文を紹介して李孫の提携を策するという提案を試みたのに始まるという。

国父全集「函札」所収「致香港総督歴数満清政府罪状並擬訂平治章程請轉商各国賛成書」がその際の陳情書であるが、該書の内容は十数年来後患を杜絶すべく「変正を力謀」する処のあつた孫文が、義和団の乱に挽救を焦慮しつつも勢力微弱にして奏効し難きを恐れ、且つ北京政府の頑冥と督撫の日和見態度とに些かの希望をも持ち得ないとして、中国保全への友誼と布教通商上の緊密さに鑑み中国改造のために英国の支援を懇請したもので、内に反側なく外に邦交を固くするならばその利益は皆に中国のみではあるまい、英国の慎裁を望むといい、然らざれば、民衆は失望の余り「自謀」を策するに至るであろうが禍変は逆料し難い、時機失すべからずであると述べ、ついで「満政の的確罪状」に就て、積弊8条——任用私人、屈倭倖、尚詐術、濫邦交、嫉外人、虐民庶、仇志士、尚殘刑と凶頑10条——誨民變、挑辺釁、仇教士、害洋商、戕使命、背公法、戮忠臣、用僭帥、忘大德、修小怨、を説いて「我が南人求治の忱はまことに之がためなり」と懇えて、いまが中外安危、満漢存亡の危機であり、求助を熱望する旨を繰返し最後に平治章程六則をあげて英国が同志の各国と協議のうえ速かに賛成の回答あらんことを懇企してやまぬと結んでいる。

所謂平治章程六則とは

- 一 遷都於適中之地
- 二 於都内立一中央政府以總其成，於各省立自治政府以資分理
- 三 公權利於天下
- 四 增文武官俸
- 五 平其政刑
- 六 變科舉為專門之學

からなっており、両広独立の観点からすれば第1条で南京漢口を首都候補にあげているのは些か合点し難いものがあるとは云え、第2条に立憲議會体制下、中央政府は首班に民望ある人物をあげて陸海軍事権と外交権を掌握させ、地方政府は中央派遣の總督を首班として国税收入の一部を国庫納入とする以外悉く中央政府の遙制をうけぬ仕組みとし、中央に外国公使、地方に総領事を臨時顧問におく点、第3条で関税收入や鉄道礦産船政商工業諸利権の分沾と教会宣教師旅店の保護に言及している点などが、英国の積極的援助によつて東南清地域に民族共和革命を実現せんと企図していた当時の孫文の政治志向を示唆するものとして留意されてよいであろう。

かくて、右の陳情書を受理した香港總督が直ちに李鴻章と数次の折渉を試みた結果、前述した劉学詢の孫文あて招請状の發送をみたわけなのである。

とすれば、5月22日の李鴻章ブレイク会談とその直後に於ける李鴻章の突如たる北上予定の変更という動きのかげに、宮崎滔天の所謂「盍し〇〇（總督のいみ）の意以為らく、両広にして吾が藥籠中のものたらんか南清の事患ふるに足らず仏国の機先以て制すべし、而して之を為すの法は李を抱き込むに如くはなし、若し李にして之に応ぜんか反抗運動を試みるものは秘密結社なり、是に於て亦孫逸仙を抱き込むの必要あり、李と孫とを握手せしむるの必要あり、若夫れ李と孫にして握手するを得んか一兵に禦らずして両広を独立せしめ自ら其上に立て駕御するを得ん」という香港總督の「新機軸の考案」がひめられていた事実を否定出来ないであろう。

但し、この際¹³⁶の李鴻章が果して馮自由のいうが如く「港督向之提議廣東自主計劃、意頗為動」であつたか否かに就ては疑問の余地なしとしない。

何故ならば、李鴻章は6月22日^{7月18日}香港總督に北上の決定を表明して上海へ赴いたのであるが、「三十三年の夢」(大本營)には、シンガポールでの康有為との合作に失敗した孫文、宮崎らが6月20日^{7月16日}香港に引返し、船中¹³⁷にあつて起事計画をねり直した折の情景のうちに、その模様を孫文の言葉として「李遂に情に堪えずして今日を將て北上の途に就んとす、仍て〇〇（總督をさす）は之を此處に扼してその行を止めんと欲し、今日十一時を期して李と密会を約せり、故に李若しその行を止めんか吾も亦保安条令を解いて上陸せしめ共に密議を凝したきことありとて、昨夜半人を遣はして其意を漏らし以て吾が上陸して密議に列するを諾するや否やを問へり」と伝え、ついで「夕刻に到つて報あり、曰ふ李は一先上京するに決せりと、また一場の夢となれり」と李鴻章ブレイク会談の失敗に就て叙述しており、然かも、李鴻章のかかる態度決定の政治的要因には、保護上海長江内地通共章程の成立とその推進過程に外ならぬ李鴻章自身が参与して劉張両者に協力するという動きが介在していたからなのである。

即ち、李文忠公全書「電稿²²」所収の盛京堂来電^{5月28日}、盛京堂来電並致南洋^{5月29日}、寄盛京堂^{5月29日}、盛京堂来電並致鄂督蘇皖東各撫^{5月29日}、盛京堂来電^{5月30日}、とくに、江督劉来電^{5月30日}の

「北直己経糜爛、南方必須図全、所有長江一帯地方、坤与香帥、力任嚴弁匪徒保護商教、並飭上海余道、与各領事妥籌保護租界之法、立約為憑、以期彼此相安、尊処情形相同、計已布置周密、此外有無方略、尚祈電示為荷」とある電文を、覆南洋匪峴帥^{5月30日}の

「豔電慰悉、長江一帯、公与香帥、必須嚴弁匪徒保護商教、庶免外人攙奪、鴻在粵当力任保護疆土、羣匪覬覦竊發一動即危矣」や

盛京堂来電^{5月30日}の

「香帥電、時事奇変、敵処惟有謹遵保守疆土聯絡一氣之旨、長江一帯止有会匪、並無可恃義民、惟有遵照歷年奏定章程、嚴肇重弁、袁帥不声張極是云、峴帥電、欲保東南疆土、留為大局轉機、必当如尊処沁電弁法云」

に併考し、且つ、盛京堂来電並致江鄂督蘇皖撫^{6月初1日}、盛京堂上海道来電並致江鄂督^{6月初2日}、急覆盛京堂等^{6月初2日}、などを通観すれば這般の事情は明白であろう。

加之、李鴻章の広東出発の3日前に當る6月18日には、許応駿と福州駐在領事の間に相互保護約章が締結されて、東南清地域があげて東南保護約款の適用範囲にくみ込まれたことや、南洋大臣劉坤一等来電¹³⁸、两江總督劉坤一等請授李鴻章全權与各国電商藉探消息以間敵謀摺¹³⁹、鄂督張香帥来電¹⁴⁰などからも見易い通り、李鴻章の北上には劉坤一、張之洞らの一致した北京政府への強い要請が裏付けられていたこと、乃至は李鴻章の内外に亘る積極的な和平活動に考量すれば、1カ月に及ぶ李鴻章の広東留任は自己のおかれた政治的境位をふまえたうえで、北京政局の絶望的推移を慎重ににらみ合せながら、表面、香港總督と不即不離の態度をとりつつ、同時にその反面、劉坤一、張之洞らと緊密に協力して、着々、南清秩序維持への態勢がための推進し、機熟すとみるや、それ迄の表面的曖昧さを一擲して、ブレイクと孫文派との結びつきに楔をうちこみ、云うなればイギリス帝国主義のヒモつきたる孫文派の両広独立という革命計画を一挙に葬りさつて北上せんとするに至つたものと解釈するのが、むしろ、妥当と思量されるが故である。

想えば、上海に於ける英米側の李鴻章忌避にも無理からぬ理由があつたとすべきであろう。

然りとすれば、李鴻章の北上問題にまつわる東南保護約款のもつ政治的意味は、イギリス帝国主義の清末中国瓜分への野望と孫文派の革命企図とを両つながら同時に一蹴し去つた政治支柱という機能的役割を演じた点で、張之洞、劉坤一の自立軍起義弾圧の場合と同一姿勢でありつつ、然かも更に明白なかたちで、その反帝的反革命的政治性格を露呈していると評して差支えないのではあるまいか。

況して「梁任公先生年譜長編初稿⁹」が、康梁派の動向を記して「肥賊（李鴻章）劉豚（劉学詢）為我輩無限阻力、能並図之最善也¹⁴²」とか、起事には必ずまず広東を占領すべく「得省城、不必戕肥賊、但以之為傀儡最妙¹⁴³」とかいい、小田切領事報告に「劉学詢ガ広州府ニ於ケル信憑スヘキ探偵ヨリ受領シタル報告ニ拠レバ、康有為ハ地方暴徒ノ首領タル欧轡及新桂並三合会ノ共動ト諸省ニ於ケル哥老会員ノ援助ヲ以テ遠カラズ広東湖南湖北及江蘇諸省ニ於テ反旗ヲ翻スベシト云フ、而シテ其携帯スル兵器ハ外国ヨリ輸入¹⁴⁴

セラルベシトノ説アリ、湖南雲南及安徽省ニ於ケル哥老会徒ノ運動ニ頗ル疑ハシトノ風説最近殆ソド一箇月間行ハルニ由リ、以上ノ風説ハ稍々信ヲ置クニ足ルモノナラン」とあり、且つ又「国父孫中山先生年譜初稿」光緒26年6月25日（7月21日）の条に、なおも、「何啓告称、香港総督ト力、賛成有一華南民主政府」と明記されてある如き、保皇会と孫文派との活潑な運動の展開をみていたという現実状況に於てである。

5 む す び

以上、私は、義和団の乱のさなかに成立をみた南清秩序維持協定としての東南保護約款に就てその政治性格を究明すべく、とくに、張之洞、劉坤一、李鴻章の動静に視点をすえて、ささやかながら若干の考察を試みた。

そして、考察の結果は、東南保護約款が究極的には清朝の支配体制を延命せしめる政治的1支柱となつたとは云うものの、約款の提案動機や政治的意図を北京の陥落も必至という当時の絶望的客観情勢にてらして考えるならば、張之洞の場合にとりわけ顕著であつた如く、多分に清末中国植民地化の危機の防衛という反帝的抵抗志向が底流していたとみられること、及びこの東南保護約款が自立軍起義弾圧の際に有力な法的政治的支柱をなしていたという事実から、約款が反保皇維新的乃至は反自立軍反康梁派的性格をもつこと、更に東南保護約款の成立と東南清九省への拡大適用とが、香港総督ブレイクと結びついた孫文派の民族共和革命運動に致命的打撃を与えんとした李鴻章の動きの否定すべからざる政治背景をなしていたという事実から、約款のもつ反帝反革命的乃至は反英反孫文派の性格をも、それぞれに確認し得たと思う。

とすれば、東南保護約款の清末史上に占める政治史的意義は、単に所謂東南互保ということ以上に、それが反帝国主義的反保皇維新的反民族共和革命的内外二重構造を具有しつつ、清末中国をめぐる帝国主義的勢力間の相互矛盾をついて、義和団の乱を北清事變の規模に喰いとめ、かくして、清末中国の植民地分割支配への危機を防衛すると同時に、破局に瀕していた清朝支配体制の命脈をも辛じて支える政治的役割を果し得たという処に見出されるとして宜しいであろう。

一体、義和団の乱を契機として、清朝權威の失墜とは逆比例的に漢民族の政治勢力が大きく擡頭した事實は、清末革命史上、我々の見逃し得ないところであるが、然しそれは、単に孫文「自伝」にいうが如き革命勢力のもりあがりという意味にのみ限定して考えるべき事實ではなく、支配権力機構たる北京政府をはじめとする清末社会全般にわたつて看取される注目すべき歴史的趨勢であつたと思う。そして、その史的因縁を辿るとき、私は、その一要因として、義和団の乱に際しての李鴻章、劉坤一、張之洞ら一約款交渉の当事者たる盛宣懷は大局的にみれば三者の corrisponent 的機能を演じた存在である一の目覚しい和平的政治活動の介在を指摘せざるを得ないのであり、然かもその具体的例証のひとつに上述の如き政治的機能性格を具有する南東保護約款の成立をあげたいのである。

なお、東南保護約款の反帝的防衛側面を示唆するより具体的な例証としては、光緒26

年7月30日^{1900年}8月24日に突如として惹起された東本願寺布教所焼失にからむ厦門事件に際して互相保護約章の演じた反日抵抗機能の場合が恰好のてびきとなるかと思うのであるが、之については別稿で¹⁴⁶考察を加えることとし、いまは省略に従いたい。

〔後 記〕

(1959. 7. 30)

本稿は昭和33年11月の京都大学東洋史談話会大会に於て要旨を発表したものである。最後に申添えたいのは、小論が日中関係史料のみに基く立論にすぎぬという史料制約からくる論考の欠陥についての指摘であるが、然しこれはいまの私の能力を超えた重荷でもあるので結局断念せざるを得なかつた。英米独仏露伊及びポルトガル、ベルギー等欧米関係各国の外交文書ジャーナルを駆使した国際政治史的視野からの労作による深く且つ鋭い御示教を渴望してやまない次第である。

擱筆に当り懇切なアドバイスを惜まれなかつた東京大学教授榎一雄、お茶の水大学教授市古宙三両氏に対し御礼申上げたい。

註 解

- 1 日本外交文書 第33巻 別冊 「北清事変上」所収「三、南清秩序維持協定」による。
- 2 盛尚書愚齋存稿「誥授光祿大夫太子少保郵伝大臣顯孝杏蓀府君行述」にいう。
- 3 中国近代史資料叢刊 義和団Ⅲ「有関東南互保資料」所収「報紙の社論和報導」のうちの申報記事。
- 4 統碑伝集巻31所収、劉坤一遺集も併照のこと。
- 5 清史稿列伝224所収。
- 6 統碑伝集巻4所収。
- 7 南清秩序維持協定所収「502、劉張両總督ト各国領事トノ秩序維持協定始末報告ノ件附屬書2」「512、長江沿岸ニ各国ヨリノ出兵見合方ニ付盛宣懷ヨリ各領事宛協定請求並右ニ対スル領事会議ノ状況報告ノ件附屬書2」。
- 8 註7の512附屬書と義和団Ⅲ所収「中外日報」。
- 9 愚齋存稿 卷36 電報13「李欽使暨江鄂蘇皖贛湘各督撫電奏5月26日」。(以下「存稿」と略称)
- 10 劉忠誠公遺集 電奏2「劉坤一張之洞寄總署電^{光緒26年}5月19日」。
- 11 存稿 卷35 電報12「寄總署許大臣5月初2日」以下の電文数通。
- 12 註11所収「劉峴帥來電5月18日」。
- 13 蔽中平「中国近代經濟史統計資料選輯2」所収の表2租界による。
- 14 鹿島「日本外交政策の史的考察」「日英外交史」外務省「小村外交史」^{信夫 中山}「日露戦争史の研究」。
- 15 北清事変上「394、清国変乱ニ対スル仏国ノ態度報告ノ件」所収。
- 16 雲南雜誌選輯(中国科学院 歴史研究所第3所)「六、帝國主義侵略雲南」の各論説参照。
- 17 註15所収「445、英人ミトフォードノ対日誹謗論文ニ付報告ノ件別紙甲号」。
- 18 註17の445号文書。
- 19 北清事変上「494 仏紙ノ対日好感論調報告ノ件」。
- 20 存稿 卷35 電報12「寄江督劉峴帥鄂督張香帥5月18日」「寄江鄂兩帥5月19日」など。
- 21 右書「張香帥來電5月20日」「劉峴帥致榮中堂5月21日」など。
- 22 張文襄公全集160「張之洞致江寧劉制台」。
- 23 右書103「張之洞札江漢關照会各領事力任保護洋人」。
- 24 右書106「張之洞致華盛頓伍欽差電」「張之洞致倫敦羅欽差華盛頓伍欽差東京李欽差電」。

- 25 張文襄公全集¹⁶⁰「張之洞致江寧劉制台電 5 月 22 日」。
- 26 劉坤一遺集電奏 2 「寄東撫袁光緒 26 年 5 月 30 日」，光緒朝中日交涉史料^{卷53 3807}附件「兩江總督劉坤一等瀝陳時局危急電」。(以下「交涉史料」とよぶ)
- 27 北清事変上「123 劉總督ノ哥老会領袖招撫ノ件」。
- 28 右書「96 北清暴動並ニ南清ノ状況ニ関シ意見具申ノ件明治 33 年 6 月 12 日」。
- 29 拙稿「唐才常と自立軍起義」(^{日本歴史}85・88)「庚子惠州の役」(^{歴史教育}37・9,10) 併照。
- 30 存稿^{卷36 電報13} 所収。
- 31 交涉史料^{卷53 3792}の上諭と同書³⁷³⁹「軍機処寄各直督撫上諭」。之に対する南清督撫の反応としては存稿^{36 電報13}「李中堂來電 5 月 29 日」が恰好であろう。
- 32 存稿^{36 電報13}「寄李中堂劉峴帥張香帥 5 月 28 日」「寄李中堂劉峴帥張香帥 5 月 29 日」。
- 33 存稿「行述」によれば道員沈瑜慶，陶森甲も清国側委員に任命はされたい。
- 34 南清秩序維持協定「502 劉張兩總督ト各国領事トノ秩序維持協定始末報告ノ件」。
- 35 註 34 の附属書 1。
- 36 註 34 の「498，在留民保護南清ノ秩序維持及各国ノ態度等ニ付白国外相ノ談話ノ件」。
- 37 註 34。
- 38 註 34。
- 39 註 34 と「501，南清秩序維持協定ノ解釈ニ関スル領事會議ノ決議報告ノ件」及び，「508 南清秩序維持協定公文ニ付報告ノ件」。上海海關道への正式公文は次の通りに報告されている。曰く「兩江總督及湖広總督ハ各其管轄地方ニ於ケル平和ヲ維持シ生命財産ヲ保護シ暴動若クハ叛乱ノ為メ生ジタル損害ニ対シテハ其責ニ任スヘシトノ同總督等ノ保障ヲ貴下ヲ經テ了承セリ(此間ニ在太沽聯合艦隊司令官ノ發布シタル告示ヲ挿入ス)因テ本官等ハ清国政府トノ条約ニ於テ規定シアルカ如ク該兩總督ノ管轄地方ニ於ケル外国人ノ權利ヲ守護スルノ力アリ，又現ニ確保スル限りハ，我カ各政府ハ单独ニ若クハ聯合シテ揚子江沿岸ニ於テ何等ノ挙措ヲ執リ若クハ軍隊ヲ上陸セシムルノ意志ヲ既往及現在ニ於テ抱有セサル旨貴下ヨリ右兩總督ヘ保障セラレンコトヲ希望ス」。
- 40 存稿^{36 電報13}「寄李中堂劉峴帥各帥 5 月 30 日」「東京李木齋欽使來電 6 月 2 日」「寄劉峴帥 6 月 3 日」「寄漸藩譚方伯 6 月 5 日」など。
- 41 註 34 と「496，秩序維持ニ付各国領事ト協議方劉張兩總督ヘ提議ノ始末並ニ領事ヨリ兩總督管下ヲ中立トナス提議ニ付請訓ノ件」。
- 42 コルヂエ「支那外交史第 27 章長江の總督」にいうコルヂエの説明。
- 43 南清秩序維持協定「496 (附記) 右ニ対スル本省意見」「499，劉張兩總督管下ヲ中立トナス提議ニ関シ回訓ノ件」。
- 44 註 34。
- 45 南清秩序維持協定「512，長江沿岸ニ各国ヨリノ出兵見合方ニ付盛宣懷ヨリ各領事宛協定請求並右ニ対スル領事會議ノ状況報告ノ件」。
- 46 註 45。
- 47 交涉史料^{卷53 3795}「軍機処電寄李鴻章李秉衡等諭旨 5 月 29 日」^{卷53 3800}「軍機処電寄沿江沿海 各督撫諭旨 5 月 30 日」。
- 48 註 45 と「513，排外詔勅ニ対スル劉總督ノ苦慮並ニ秩序維持協定ノ批准及各国ヨリ沿江派艦見合方ニ関スル同總督ノ希望等報告ノ件」及び存稿^{36 電報13}「寄江鄂劉張兩帥 6 月 7 日」。
- 49 存稿^{37 電報14}「寄劉張兩督帥 6 月 11 日」と註 48 の 513 号文書。
- 50 南清秩序維持協定「516 秩序維持協定中長江沿岸出兵見合方請求承認ノ可否ニ付請訓ノ件」を 514，515，517 号文書に併照。

- 51 げんに小田切領事は「彼等ニ於テ頗ル安堵ノ思ヲナシタルハ較著ナル事實ニシテ」とか「兩總督ノ決心ハ前時ニ比シテ一層確固タルニ至リシハ蓋シ推測ニ難カラサル所ナリ」と約款成立の結果を伝えている。
- 52 南清秩序維持協定「518号文書」。
- 53 存稿³⁶ 電報13 「浙藩樞密方伯來電6月6日」。
- 54 「閩督許筠帥來電6月6日」「寄閩督許筠帥6月7日」。
- 55 存稿³⁶ 電報13 所収。
- 56 註54。
- 57 南清秩序維持協定「528, 閩浙總督ト各国領事トノ外人保護協定締結始末報告ノ件 附屬書1・2」。
- 58 註57。
- 59 註57。
- 60 「524, 閩浙總督及浙江巡撫ヨリ秩序維持協定ニ加入申出始末報告ノ件」。
- 61 「529 秩序維持並外人保護ノ協定 各国領事ト締結ニ関スル任地清官ノ布告写進達ノ件 附屬書1・2」。
- 62 北清事変中「清国地方官ノ態度」所収「1202, 匪徒勦滅方ニ付張總督ノ告示写送達ノ件 附屬書」に曰く「為遵旨保衛地方事, 照得北方因匪徒滋事, 以致各国生衅, 人心搖動, 大局攸関, 本部堂院, 奉到五月二十九・三十等日寄諭, 有現在京城仍極力保護各国使館, 及各省督撫務須相機審勢保定疆土等語, 自當欽遵此次諭旨, 設法弁理, 已会同两江督部堂劉, 詳加等畫, 將東南各省均行一力保全, 現与各国領事商定, 但使各国水師艦隊不入長江, 則內地各省所有各国人口產業, 均歸地方官極力保護, 業經妥議弁法, 電奏在案, 此乃保衛地方百姓身家性命之至計, 誠恐民間未知此次奏明弁法, 土匪莠民藉端騷擾致害全局, 為此亟行出示曉諭, 一切軍民人等知悉, 爾等須知, 此次北方戰事本非朝廷意料所及, 此次諭旨, 現在京城仍保護使館, 与各省現在仍遵照歷年頒行約章, 保護租界教堂, 同為保護大局起見, 現在各国既願歸我保護, 水師艦隊不擾長江, 則居民商務均可安靜如常, 土匪不致乘機作乱, 其所以保全沿江內地各省百姓之身家性命者, 裨益良多, 斷不宜輕啓衅端, 庶可仰体朝廷顧全大局之意, 紳耆人等尤當剴切開導, 如此乃所以保安 國家完善之疆土, 既所以益彰聖朝如天之至仁, 既經此次示諭之後, 如有捏造謠言煽惑人心及聚眾擾及租界教堂者, 定即 嚴密查拏, 按照土匪會匪懲弁, 其有匪徒藉端騷擾意圖蠢動者, 各處均已駐重兵, 立行痛勦, 各兵勇差役有滋事擾害者, 即照軍法懲弁, 務使商民安業地方平靖, 以仰副諭旨相機審勢保全疆土之意, 各宜凜遵勿違, 切切特示」。
- 63 存稿³⁶ 電報13 「劉峴帥來電6月7日」に曰く「為出示曉諭事, 照得前由北地匪徒肇衅, 誠恐各處土匪, 煽惑愚民, 藉端滋鬧, 業經一再嚴切示禁, 並電飭各屬, 凡教堂商務須会同地方紳董, 協力保護諄切告誡, 不啻三令五申, 此次戰事本非朝廷意料所及, 兩國商民仍當保護, 非特彼此互有商民客居其地, 亦天理人情教化應爾, 現復由上海道与各国領事議定, 在內地及長江等處各国商教人民財產, 均由地方官力任保護, 以期彼此相安, 以後無論如何, 必當一律照弁, 為此再行曉諭, 爾諸色軍民人等一体知悉, 自示之後, 務各安分守法, 須知各国商教人等, 仍照約一律嚴密保護, 如有造謠滋事匪徒, 定即查拏法正決不寬貸, 其各凜遵毋違, 特示」。以上の劉張兩者の態度を, 例えば万一を危惧してシーモア中將(英)が上海警備を理由に印度兵2000を集結した際に於ける列国側とくに英独日三国の紛々たる意見の対立と劉張らの不同意態度とに考量すると, 東南保護約款の反帝的防衛態度は更に鮮明となろう。その消息については北清事変上「沿江警備」に詳しい。
- 64 交渉史料^{卷54}₃₈₅₇「两江總督劉坤一奏報籌弁防務情形摺6月15日」^{卷55}₃₉₂₃「安徽巡撫王之春覆陳籌備戰守情形摺7月4日」。劉坤一遺集奏疏³³「覆陳籌辦防務情形摺光緒26年6月15日」。
- 65 北清事変上「各地團匪暴動狀況報告(3) 沿江一帯狀況」所収「120 漢口ノ狀況報告ノ件(3)」。

- 66 註65の「117 南京状況統報ノ件」。
- 67 註65の「118 人心鎮撫ノ為メ筆頭総領事ヨリ告示ニ付報告ノ件附屬書」。この外、98、長江一帯状況報告ノ件(1)、105 長江一帯各地状況報告ノ件(2)や104、107、116、124号文書にいう上海状況報告、111、湖北省内ノ哥老会員跋扈ニ付在留邦人憂慮ノ件や122、123、126、149号文書に報告された塩泉徐老虎招撫の事情など参考となろう。
- 68 北清事変上「清国地方官ノ態度」所収「1189 南清秩序維持及匪徒勦定ニ関スル各督撫ノ連署上奏並張総督ノ態度ニ付報告ノ件」。
- 69 例えば、交渉史料「³⁵3807 附件1、两江總督劉坤一等瀝陳時局危急電」⁵⁵3911 两江總督劉坤一等請授李鴻章全權与各国電商藉探消息以間敵謀摺」存稿³⁶電報13「寄京慶親王榮中堂」。
- 70 張文襄公全集¹⁶⁰「張之洞致倫敦羅欽差華盛頓伍欽差東京李欽差電」「張之洞致東京李欽差電」、北清事変中「清国地方官ノ態度」所収「1189 南清秩序維持及匪徒勦定ニ関スル各督撫ノ連署上奏並張総督ノ態度ニ付報告ノ件」、存稿³⁶電報12「寄各省督撫帥」「寄江鄂劉張兩帥」併照。
- 71 「清国地方官ノ態度」所収「1190 劉張李三總督ノ矯勅不遵奉決議ノ件」「1196 鹿伝霖北上情報ノ件」(附記4)、存稿³⁶電報13「江督劉峴帥來電」「張香帥來電」「寄粵督李中堂鄂督張香帥江督劉峴帥」など。
- 72 「各地匪徒暴動状況報告(3) 沿江一帯状況」所収 122、123、126、149号文書をみれば揚州瓜州鎮江一帯を根拠とし数万の部下を擁し两江兩湖大元帥と称して江浙地方に絶大の勢力を振る塩泉徐老虎の動向を「義和団匪ノ南下ヨリモ寧ロ徐老虎一輩ノ機ニ乗ジテ事ヲ滋シ外人ノ生命財産ニ危害ヲ加エ其結果トシテ外国トノ交渉ヲ惹起ス」と危機した劉坤一が苦心の挙句「恰カモ劉永福ノ清国政府ニ降服シタル場合ノ如」き条件で招致するに奏功した顛末が了解されよう。
- 73 「清国地方官ノ態度」所収「1187 南京上海鎮江武備状況報告ノ件」「1201 匪徒勦滅方ニ付上海知県ノ告示写進進ノ件附屬書」。
- 74 「1195 張総督ノ秩序維持及外人保護ノ決意並地方ノ人心動向ニ付報告ノ件」。
- 75 「1205 劉張兩總督ノ決意及清帝上諭報告ノ件」。
- 76 「1225 劉張兩總督ノ外人權益保護並外國軍隊長江進入憂慮ノ意向報告ノ件」。
- 77 「1209 張総督ノ北京派兵内情報報告ノ件」。
- 78 「1210 時局ニ対スル劉總督意見情報ノ件」。
- 79 「1212 張総督ノ秘密會議開催ノ模様並同總督ノ真意ニ付報告ノ件」。
- 80 「1214 錫良及于陰霖ノ北上情報ノ件」。
- 81 註80。
- 82 「1237 康有為一派ノ情報並聯合軍ノ西太后ヘノ加害ノ憂慮等報告ノ件」。
- 83 中国近代史資料叢刊 戊戌変法Ⅲの報紙新聞「北京要事彙聞」「廃止要聞彙録」、梁啓超「書十二月二十四日偽上諭後」、戊戌政変記^{第2篇}_{第3篇}、清議報「張之洞論」(58冊)「張之洞逆賊定案議」(58冊)「書湖北大獄」(60冊)「張之洞論」(66冊)を併照すれば首尾一貫渝らざる劉坤一の態度との対比に於て張之洞のありかたが明瞭となろう。
- 84 「兎に角劉坤一と比しては見識の下ること数等たるは明かなり」とある。近衛霞山公所収。
- 85 「逆賊張之洞罪案重父(63冊)」。
- 86 各地匪徒暴動状況報告(3)所収「153 平和維持宣言交換後ノ南清各地ノ状況報告ノ件」。
- 87 交渉史料⁵⁵3911「两江總督劉坤一等請授李鴻章全權与各国電商藉探消息以間敵謀摺7月1日」。劉坤一還集電奏2「寄鄂督張光緒26年6月26日」併照。
- 88 各地匪徒暴動状況報告(3)「148 漢口ノ状況報告ノ件(5)」。
- 89 清国地方官ノ態度「1239 皇帝及皇太后ノ安全ヲ懇請スル劉張兩總督連署電報ノ件附屬書」。

90 1239号文書。

91 「1240 清廷安全ノ我保証ニ対シ劉張兩總督謝電ノ件附屬書1・2」。更ニ1242, 1243, 1244号文書に日中往復電文が収録されているが、之を近衛霞山公第4章にいう劉坤一と近衛との交渉や近衛の所謂裏面の苦心に考量すると事態は一段と興味を増す。

92 「1243 東南地方保護ニ関シ劉張兩總督電報通送ノ件」に「昨因聯軍入京、電滬領轉請各国勿驚兩宮、急望兩日內電復、以慰天下臣民、別無他意、現因兩宮先行、東南保護之約、各督撫仍当尽力自任、請達外部、坤一之洞、宥」とあるのは、存稿39電報16「寄劉峴帥張香帥」「張香帥來電7月25日 兼致峴帥」に「…現聞兩宮先行…」とあり、之が正しいと思う。

93 清国地方官ノ態度「1261 列強ノ清廷回鑾希望ニ対スル張之洞ノ態度ニ付報告ノ件」、各地団匪暴動狀況報告(3)「153 平和維持宣言交換後ノ南清各地ノ狀況報告ノ件」併照。

94 張文襄公全集121 公牘36「查拏自立会匪示」同51 奏議「宣布康党逆跡並查拏自立会匪首片」。

95 各地団匪暴動狀況報告(3)「169号文書」。

96 張文襄公全集104 公牘19「咨出使日本国大臣送勸戒国会文及示稿」。

97 右集「咨出使英国大臣請飭諭邱菽園及各華商勿信匪党」。

98 右集「咨出使英国大臣切商英外部查禁匪党」に戊戌変法Ⅱ「致倫敦羅欽差」「与余晉珊」「密陳嚴拿富有票匪片 劉坤一」「上諭」を併照。

99 唐才常と自立軍起義(日本歴史 85・88)。なお戊戌変法Ⅳ「雑録」、辛亥革命(1)「唐才常漢口之役」は恰好の資料である。

100 光緒24年から26年の頃にかけて、とくに26年に収録された数多くの書簡は貴重である。

101 外務省保管記録文書「義和団事變關係一件」所収「清国事變ニ関スル政党及団体ノ意向明治33年6月25日」。

102 清国地方官ノ態度「1237 康有為一派ノ情報並聯合軍ノ西太后ヘノ加害ノ憂慮等報告ノ件」。

103 中国近代史資料叢刊 辛亥革命(1)「唐才常漢口之役」所収。曰く「張之洞者、其才力不及鴻章、而饒辱志士之狼戾肆恣、較之鴻章之手握兵符為尤甚、才常藉日本人著手運動之初、亦嘗通殷勤於張之洞、欲利用之、而繼以無復可望、不復置意、及至北事之起、張之洞坐擁練兵、漸露日暮途遠、倒行逆施之概、而自立軍之厚集兵力、時時過江而点兵、風譁之起、已非一日、大通前軍之敗、距唐林授首已十余日、之洞固已熟聞之、而末發覺者、則實以有風以自立軍將擁己挈兩湖宣言獨立者也…中略…而之洞終狐疑莫能自定、才常先揚言於外人曰「倘張之洞奉滿廷之偽諭以排外、吾国先殺之洞以自任保護外人之事」語浸聞於之洞、繼又偵知唐林之所為与己絶反对、事急時、且將布告在漢各国領事、扼武昌獨立、之洞乃突發而擒之」と。因みに清史紀事本末の叙述も殆んど同一である。

104 清史紀事本末「自立軍之失敗」。なお梁任公先生年譜長編初稿 9巻にも「這次漢口機關的失敗…唐絳丞氏和鄂督張之洞的衝突、是一個重要原因」と記してある。

105 註79。

106 馮自由「中華民國開国前革命史」の「庚子唐才常漢口之役」収録。但し范文瀾「中国近代史」もいう如く具体的直接的結びつきは確証がないようである。なおこの前後に於ける康梁派の海外動静については拙稿「光緒末年に於ける在日康梁派の動静」(ワシントン大学 Lo研究室 「康有為生誕百年紀念論集」)のうちにもスケッチしておいたが「梁任公先生年譜長編初稿 9巻」の参照が是非必要である。

107 この外考えられる理由としては厦門事件の場合には英米二国を対日牽制に利用した如くこの際対英牽制のために日本を利用するという所謂以夷制夷の外交術策の適用であろう。

108 註102。

109 各地団匪暴動狀況報告(3)「157 富有票匪ノ蔓延並ニ彈圧情報ノ件」。

- 110 「張之洞逆賊定案議^{漢陸熱血人}」(58冊)。^{漢陸熱血人}
- 111 「張之洞論 時論訳録」(66冊)。この外、「張之洞論」(58冊)「書湖北大獄」(60冊)「逆賊張之洞罪案」(63冊)「張之洞勸戒上海国会及出洋学生文書後」(66冊)「駁后党逆賊張之洞于陰謀誣捏偽示」(66冊)をみれば張之洞を鄙夫也、佞人也、巧宦也、逆党也、賊臣也と痛罵する論難が随処に横溢している。
- 112 東華統録^{光緒朝}162 9月癸巳の項。なお劉坤一遺集奏疏34「剿辦大通票匪摺」「密陳嚴拏富有票匪片」も参照のこと。
- 113 交渉史料^{卷53}3781「軍機処寄直隸總督裕祿上諭」。
- 114 清国地方官ノ態度「1184 李鴻章召命情報ノ件附記1」。
- 115 1184号文書附記2。
- 116 1184号文書附記4、交渉史料^{卷55}3921「大学士李鴻章奏報交卸起程日期並陳保疆籌餉布置情形摺」。
- 117 交渉史料^{卷53}3834「上諭」^{卷53}3835「軍機処電寄李鴻章諭旨」。
- 118 清国地方官ノ態度「1215、李鴻章北上決意ノ件」と1218号文書。
- 119 「1219 李鴻章直隸轉出ニ英人危惧ノ件」「1224 李鴻章上海到着ノ件」。
- 120 交渉史料^{卷54}3893「軍機処電寄李鴻章諭旨」。
- 121 東華統録160 7月癸卯丑癸の項、清国地方官ノ態度「1234 李鴻章ト会見ノ件(3)」。
- 122 交渉史料^{卷55}3931「軍機処電寄李鴻章諭旨」以下、7月14、19、25、30日、8月6日に北上督促が伝達されている。
- 123 右書^{卷55}3921「大学士李鴻章奏報交卸起程日期並陳保疆籌餉布置情形摺」。
- 124 右書^{卷55}3916「大学士李鴻章等共籌補救之策摺」。
- 125 李文忠公全書「電稿」を通看すれば李鴻章の対外和平のよびかけが洵に多角的であつたことがわかるが「日本李使來電並致江鄂督」「鄂督張來電」「日本李使來電並致江鄂閩督盛京堂」「寄江督劉鄂督張」をみれば李鴻章らの対日感情が伺われよう。
- 126 交渉史料^{卷56}3985「大学士李鴻章奏陳時局變遷急籌補救摺」、^{卷56}3970「大学士李鴻章等密陳款局急宜挽救不可再失事機摺」。
- 127 右書^{卷56}3978「軍機処電寄李鴻章等諭旨」、^{卷56}3984「軍機処電寄李鴻章諭旨」及び3985、3986の上諭。但し俄艦で北上せよとの諭旨は6月12日の軍機処電からであり、6月7日と10日の軍機処電寄李鴻章諭旨(3822/3828)には見当らぬ点から推量すれば、恐らくは李鴻章の奏請にでたものであろうか。
- 128 清国地方官ノ態度「1251 李鴻章出發統報ノ件」。
- 129 右書「1253 李鴻章天津着ノ件」。
- 130 北清事変中「和議ノ開始」所収「1474号文書」。
- 131 清国地方官ノ態度「1252 李鴻章北上統報並閩内外鉄道移管ノ露清密約情報ノ件」「1246 李鴻章ノ北上ト其親露態度ニ付報告ノ件」「1250 李鴻章ト最後ノ会見及同人北上ノ件」。
- 132 この辺りの概要については拙稿「庚子惠州の役」(^{歴史教育}37.9.10)及び「国父孫中山先生年譜初稿」併照。
- 133 続対支回顧録下巻 列伝所収「内田良平君」。
- 134 革命逸史初集「劉學詢与革命党之關係」同集第4集「孫總理庚子運動廣東獨立始末」併照。
- 135 三十三年の夢(大本營)所収。
- 136 孫總理庚子運動廣東獨立始末。なお陳少白「興中会革命史要」も参照。
- 137 但し国父孫中山先生年譜初稿には5月21日日本を出発、25日香港より西貢にむかい6月中旬(7月11日前後)香港に引返し6月21日(7月16日)香港船中で会議、24日香港より日本に赴く

とある。従つて外務省文書を主要資料とした私の推定とは些か喰違ひがあるが後考に俟ちたい。

- 138 交渉史料^{巻53}_{3839。}
- 139 交渉史料^{巻55}_{3911。}
- 140 存稿⁴¹_{電報17。}李文忠公全書電稿²⁴「江督劉來電^{7月24日}_{25日}」「劉坤一遺集電信1」所収の光緒26年5月～閏8月の各電文も併照。
- 141 李文忠公全書電稿²²「盛京堂來電」「鄂督張來電並致南洋川閩蘇浙皖予湘粵山東各督撫」「盛京堂來電並致南洋」「寄盛京堂」「盛京堂來電」「江督劉來電」「覆南洋劉峴帥」「盛京堂來電」同²³「盛京堂來電並致江鄂督蘇皖撫」「盛京堂來電並致江鄂督蘇皖撫」「盛京堂上海道來電並致江鄂」「督盛京堂來電」「盛京堂來電並致江閩浙東予粵各督撫」同²⁴「盛京堂呈電並致江鄂督東撫」「江督劉來電並致盛京堂鄂督」「盛京堂呈電並致江鄂督」「鄂督張來電」などが這般の消息を雄弁に物語っていると思う。
- 142 任公先生復誠忠雅三君書^{2月28日。}
- 143 致南海夫子大人書^{3月13日。}
- 144 日本外交文書^{第33巻}_{別冊1}北清事変上「各地団匪暴動狀況報告(6)南海狀況」所収「282, 康有為ノ廣東湖広江蘇ニ反乱計畫説情報ノ件」。
- 145 ^{中国近代史資料叢刊}義和團Ⅲ所収「英国藍皮書」(China No. 3 : Correspondence Respecting the Insurrectionary Movement in China)をみれば危惧と安堵と不安の交錯する英国側の動向が了解出来よう。なお不安に駆られた英国のインド兵上海派遣に対する米国側の批判的反應については同書「美国會議文件」(Foreign Relations of the United States 1900)を参照のこと。
- 146 「厦門事件と互相保護約章」(日本歴史に近載予定)。

Summary

A Study of Tung Nan Pao Hu Yüeh Kuan.

Kazumi Nagai

The object of this Article is to research for the political character of Tung Nan Pao Hu Yüeh Kuan (東南保護約款) dated June 27, 1900, between such the chinese viceroy as Liu Knn i (劉坤一), Chang Chih Tung (張之洞) and the Group of Consuls at Shanghai. For the purpose of this studying, I divided my discussion into three parts as follows. : ① On the process of Realization of Tung Nan pao Hu Yüeh Kuan that strictly speaking it should be settled to consist of both "General Regulation for the protection of the Shanghai the Yangtze Valley and the Interior" and "Hu Hsiang Pao Hu Yüeh Chang" (互相保護約章) ② On the political movement of Liu Kun i and Chang Chih Tung who were afraid of the Chinese Fate going to ruin from Boxer Rebellion and determined to protect Tung Nan Ching (東南清) from both the Interference of imperialistic Powers and Tang Tsai Chung's Tzu Li Chun (唐才常自立軍) ③ On the political movement of Li Hao Chang (李鴻章) against Sun Yat Sen's Revolution taking share with Hongkong Governor. In this manner, my conclusion is that the political character of Tung Nan Pao Hu Yüeh Kuan was anti-imperialistic aggression, anti-innovatory and anti-revolutionary.